

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第267集

N E N E I I Y A S H I K I
根々井居屋敷遺跡 I

長野県佐久市根々井根々井居屋敷遺跡発掘調査報告書

2020.3

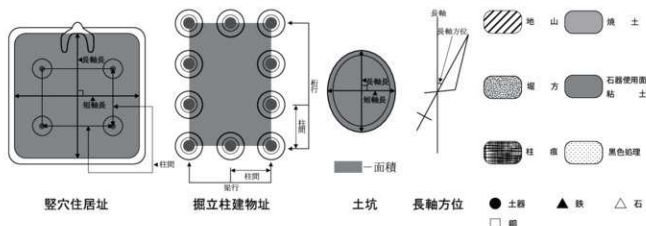
佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する根々井居屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は社会福祉法人山栄会が行う福祉施設建設に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 根々井居屋敷遺跡(N I Y)
佐久市根々井字伊勢田816外
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：平成31年4月1日～令和元年5月10日
整理：令和元年5月13日～令和3年3月19日
調査面積：690㎡
- 5 本書に掲載した地図は佐久市役所発行の地形図(1:50,000)である。
- 6 遺構測量はTSを用い3次元データを取得した。取得したデータは株式会社CUBICの「遺構君」により図化した。図面トレースは「遺構君」で行い、Adobe Illustratorで調整した。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影しAdobe Photoshopで補正等を行った。
編集はAdobe InDesignで行った。
- 7 本書の作成・編集は小林が行った。
- 8 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4(鉄器・鉄製品は 1/2)を基本とするが、これ以外の物は図中に縮尺を記した。
- 2 海拔標高は、水系標高をスケールに「標高」として記してある。また、土色の色調は1999年版「新版標準土色帖」に基づいた。
- 3 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
- 4 挿図中の網掛けは以下の表現である。

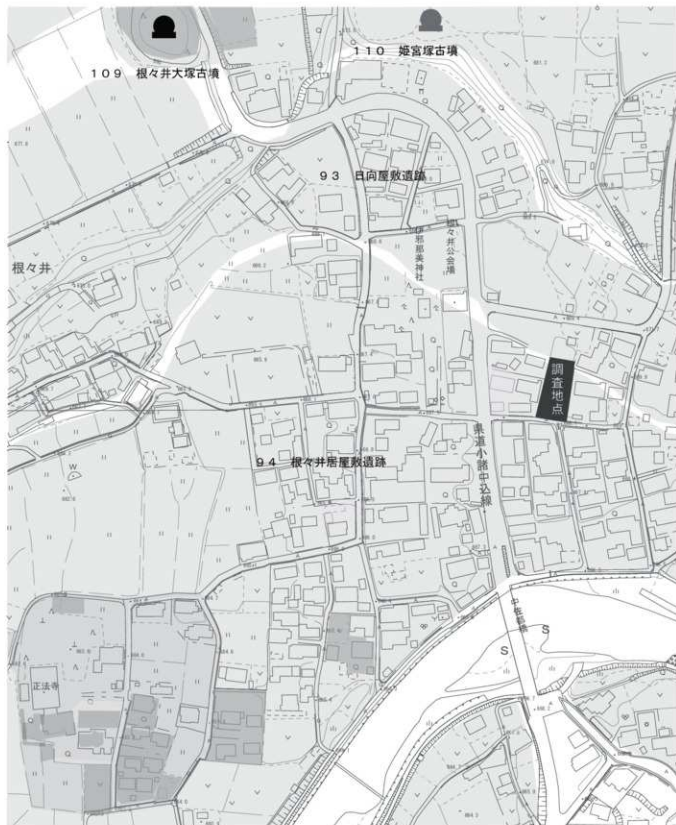


目 次

例言
凡例
目次

敷遺跡に隣接する。

今回、遺跡内で社会福祉法人山栄会により福祉施設の建設が計画されたことから、遺跡の保護を目的とし、状況を把握するための試掘調査を平成30年12月11日と平成31年3月13・14日に実施した。その結果、住居址等の遺構が検出されたため、遺構の破壊が予測される部分について記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。



第2図 調査地点周辺の過去の調査位置

第2節 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教 育 長	榊澤晴樹		
事務局	社会教育部	部 長	青木 源 (令和元年度)	三浦 一浩 (令和2年度)	
	文化振興課	課 長	東城 洋		
		企 画 幹	吉田 晃 (令和元年度)	岡部 政也 (令和2年度)	
	文化財調査係	係 長	山本秀典		
		係	小林眞寿 羽毛田卓也 富沢一明 上原 学		
			久保浩一郎 (令和元年11月まで、令和2年度)		
		調査担当者	小林眞寿		
		調 査 員	甘利隆雄 岩松茂年 大矢志穂 小林喜久子 小林節子		
			小林敏雄 堺 益子 清水律子 田中ひさ子 花岡美津子		
			細谷秀子 堀籠滋子 宮川真紀子 山口ひとみ 柳澤孝子		
			柳沢千賀子 山田叔正 油井満芳		

第3節 検出遺構・遺物の概要

遺構 竪穴住居址-1 7棟 掘立柱建物址-2棟 竪穴建物址-3棟 土坑-1 3基 溝址-2条 ビット-1 7基
遺物 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 石器・石製品 鉄器 古銭

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 住居址

● H1号住居址(第3・43図)

調査区南端で検出された。H7・8、D6、M1を切っている。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。N-10°-Wに長軸方位をとり、短軸長 5.48m、壁残高 0.29mの規模である。P12・14の2基のビットには礎石が設置されていた。この2基とP2が主柱穴と思われる。カマドは北壁の中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されていた。周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、弥生土器、石器が出土している。土師器には坏・椀・鉢・甕の器種が認められる。坏・椀のロクロからの切り離しは回転糸切である。内面はヘラミガキ後黒色処理か暗文後黒色処理である。甕は全て武蔵甕である。須恵器には坏・坏蓋・鉢・甕・瓶の器種が認められる。坏のロクロからの切り離しは回転糸切である。坏蓋は扁平な擬宝珠つまみが付く。鉢は小型の仏鉢である。弥生土器は本址に先行するM2に帰属するものである。土師器坏1、鉢、須恵器瓶なども本址に伴うものではない。石器は凹石と編物石が各1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● H2号住居址(第4・44図)

調査区東南端、中央寄りで検出された。H11を切る。N-90°-Eに長軸方位をとり、長軸長 4.27m、短軸長 3.61m、壁残高 0.23mの規模である。床面上から2基のビットが検出されているが、主柱穴は判然としなない。カマドは残存していないが、カクランにより破壊されている可能性も高い。周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、石製品が出土している。土師器には、坏・碗・皿・甕の器種が認められる。坏・碗・皿のロクロからの切り離しは回転系切であり、内面はヘラミガキ後黒色処理が施される。5は外面に墨書が認められるが判読できない。甕は「コ」字口縁の武蔵甕 14と、ハケメ調整の東海系と思われる 13が存在する。須恵器には坏・凸帯文付四耳壺の器種が認められる。坏のロクロからの切り離しは回転系切である。石製品は滑石製の白玉が1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● H3号住居址(第5・45図)

H2の東隣りに検出された。東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高 0.31mの規模である。検出範囲にはカマド、ピット等は存在しない。

遺物は、須恵器有台坏の底部片と土師器甕の底部片が各1点出土しているが、本址の時期を比定出来るものではない。

● H4号住居址(第6・46図)

調査区中央南西寄りで検出された。M1に切られる。N-0°-Wに長軸方位をとる。長軸長 4.91m、短軸長 4.87m、壁残高 0.18mの規模である。床面、掘方から計 14基のピットが検出されたが主柱穴は判然としない。カマドは北壁の中央分に構築されているが、掘方状態に破壊されていた。周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、石器、鉄製品が出土している。土師器には坏・皿・甕の器種が認められる。坏・皿のロクロからの切り離しは回転系切であり、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。皿 4には墨書が認められるが判読は出来ない。甕は武蔵甕とロクロ甕が1点ずつ出土した。須恵器には坏・坏蓋・甕の器種が認められる。坏のロクロからの切り離しは回転系切である。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代VI期に比定され、9世紀後半の実年代が想定される。

● H5号住居址(第7・47図)

H4の南西隣りに検出された。M2を切る。西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。長軸長 6.25m、壁残高 0.3mの規模である。床面上で 2基検出されたピットの内 P2は主柱穴である。検出範囲にはカマド・周溝は存在しなかった。

遺物は、土師器と石器が出土している。土師器は坏・甕・ミニチュア土器が各1点出土している。石器は磨石が1点出土している。

出土土器の形態的特徴から、本址は古墳時代後期6世紀の所産と考えられる。

● H6号住居址(第8・48図)

調査区北端に検出された。F1を切り、H13に切られる。N-0°-Wに長軸方位をとる。長軸長 6.63m、短軸長 6.29m、壁残高 0.34mの規模である。P1・3～5の4基のピットが主柱穴である。P6は出入口施設であろう。壁際には均等に礎石が配置されており、壁柱穴と同様な機能をはたしたものと考えられる。カマドは北壁の中央部分に検出されたが、掘方状態に破壊されていた。掘方からは旧住居が確認されており、本址は拡張して建て替えが行われたことが判明した。周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏・甕の器種が認められる。坏の底部にはヘラケズリ調整が加えられ、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。甕にはロクロ甕と武蔵甕の器種が認められる。須恵器には坏・坏蓋・有台坏・壺の器種が認められる。坏・有台坏のロクロからの切り離しはヘラ切であるが、5のみ回転系切である。壺は凸帯を持たない四耳壺の破片である。石器

は編物石と磨石が各2点出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅲ期に比定され、8世紀第Ⅲ四半期の実年代が想定される。

● H7号住居址(第9図)

調査区南端で検出された。H1に切られる。壁残高0.25mの規模である。床面上、掘方から計3基のピットが検出されたが、主柱穴は判然としない。検出範囲にはカマド、周溝は存在しなかった。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

● H8号住居址(第10・49図)

調査区南端で検出された。H1・7に切れ、M2を切る。壁残高0.16mの規模である。床面上、掘方から検出された3基のピットの内、P1・2の2基は主柱穴である。検出範囲にはカマド、周溝は存在しなかった。

遺物は、土師器、土師質土器、須恵器、石製品が出土している。土師器には皿・甕の器種が認められる。皿はロクロから回転系切で切り離した後高台を付している。内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施される。甕は武蔵甕である。土師質土器は近世以降のものである。須恵器は、底部に回転系切痕を残す坪が1点出土している。石製品は滑石製の白玉が1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅴ期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● H9号住居址(第11・50図)

H8の北隣りに検出された。H11を切る。長軸方位をN-0°-Wにとる。長軸長3.79m、短軸長3.54m、壁残高0.07mの規模である。掘方から3基のピットが検出されたが主柱穴は判然としない。カマドは北壁中央部分に存在したようであるが、遺構の残存状態が悪く不明瞭である。周溝は有さない。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、銅製品が出土している。土師器には坪・甕の器種が認められる。坪のロクロからの切り離しは回転系切である。内面は暗文後黒色処理が施される。甕は武蔵甕とロクロ甕が認められる。須恵器は坪片が1点出土した。弥生土器は中期栗林式の壺体部片が1点出土した。銅製品は「和同開珎」の完品が1点出土した。本市では7例目の出土である。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅵ期に比定され、9世紀後半の実年代が想定される。

● H10号住居址(第12・51図)

調査区中央北寄りに検出された。H15・17を切る。長軸方位をN-10°-Wにとる。長軸長6.55m、短軸長6.36m、壁残高0.36mの規模である。P1～P4の4基のピットが主柱穴である。P5は出入口施設と思われる。カマド北壁中央部分に構築されるが、掘方状態に破壊されていた。周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、石器・石製品、鉄器が出土している。土師器には坪・甕の器種が認められる。坪はヘラケズリ調整によりロクロから切り離し痕を消去している。甕は全て武蔵甕である。須恵器には坪・有台坪・坪蓋・甕の器種が認められる。坪のロクロからの切り離しは回転系切である。有台坪は底部を欠損する。坪蓋には擬宝珠状のつまみが付く。甕は広口で頸部が短いもので、成型痕はロクロナデにより消去される。石器は砥石と磨石、凹石が出土している。鉄器は短頸鎌・角釘・鋸・軸棒が出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅳ期に比定され、8世紀第Ⅳ四半期の実年代が想定される。

● H11号住居址(第13・52図)

調査区南端付近で検出された。H2・9に切られる。長軸方位をN-5°-Eにとる。長軸長3.76m、短軸長3.54m、壁残高0.13mの規模である。掘方から5基のピットが検出されたが、支柱穴は判然としない。北壁中央やや東寄りの部分には焼土が認められることから、この部分にカマドが構築されていたものと考えられる。周溝は存在しなかった。

遺物は、土師器、須恵器、鉄器が出土した。土師器には環・甕の器種が認められる。環のロクロからの切り離しは回転系切である。内面にはヘラミガキあるいは暗文後黒色処理が施される。2には墨書が認められるが判読できない。甕はロクロ甕である。須恵器は甕の口縁部片が1点出土した。鉄器は左用の鎌が1点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代VI期に比定され、9世紀後半の実年代が想定される。

● H12号住居址(第14・53図)

H9の東隣りで検出された。H11を切る。長軸方位をN-79°-Wにとる。長軸長3.76m、短軸長3.54m、壁残高0.13mの規模である。床面上から2基のピットが検出されたが、支柱穴は判然としない。カマドは判然とせず、周溝も存在しない。

遺物は、土師器と須恵器が出土した。全て環である。ロクロからの切り離しは土師器、須恵器共に回転系切である。土師器の内面にはヘラミガキ後黒色処理が施されている。3は外面に墨書が認められるが判読できない。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● H13号住居址(第15・54図)

調査区北端で検出された。H6を切り、F1に切られる。長軸方位をN-3°-Eにとる。長軸長3.33m、壁残高0.18mの規模である。カマドは北壁の中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されていたが、掘方状態に破壊されていた。柱穴、周溝は有さない。

遺物は、土師器、須恵器、石器・石製品が出土している。土師器には環・甕の器種が認められる。環のロクロからの切り離しは回転系切である。内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。甕は1点が武蔵甕のほかはロクロ甕である。須恵器には環・坏蓋・甕の器種が認められる。環のロクロからの切り離しは回転系切である。坏蓋には擬宝珠状のつまみが付く。甕は底部片である。石器は砥石・台石が石製品は白・掲白が出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● H14号住居址(第16・55図)

調査区北西端付近で検出された。H16を切る。西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.3mの規模である。検出範囲にはカマド、柱穴、周溝は認められなかった。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器が出土している。土師器には環・椀・皿・甕の器種が認められる。環・椀・皿のロクロからの切り離しは回転系切である。内面は1がナデ後黒色処理、2がヘラミガキ後黒色処理、3はナデのみである。甕は全てロクロ甕である。須恵器には環・壺の器種が認められる。環のロクロからの切り離しは回転系切である。壺は小型の薬壺である。灰釉陶器は椀の底部片が1点出土している。鉄器は基部を欠損する刀子が1点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代VI期に比定され、9世紀後半の実年代が想定される。

● H15号住居址(第17・56図)

東側をH10に切られるため、全容は不明である。壁残高0.35mの規模である。検出範囲にはカマド、柱穴、周溝は認められなかった。

遺物は須恵器の環と甕の破片が各1点出土したが、本址の時期を確定出来るものではない。

● H16号住居址(第18・57図)

南側をH14に切られ、西方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高0.16mの規模である。検出範囲にはカマド、柱穴、周溝は認められなかった。

遺物は、土師器ロクロ甕と須恵器環が各1点出土している。環のロクロからの切り離しはヘラ切である。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅱ期に比定され、8世紀第Ⅱ四半期の実年代が想定される。

● H17号住居址(第19・58図)

南側をH10に切られるため、全容は不明である。壁残高0.09mの規模である。検出範囲にはカマド、柱穴、周溝は認められなかった。

遺物は、土師器の椀が1点出土したが、本址の時期を確定出来るものではない。

第2節 竪穴建物址

● Ta1号竪穴建物址(第20・59図)

調査区西南端で検出された。Ta2を切る。南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.21mの規模である。柱穴、周溝等は存在しない。

遺物は、土師器環2点と滑石製白玉1点が出土している。土師器環は1が平安時代、2が古墳時代のものであり、本址の時期を確定出来るものではない。

● Ta2号竪穴建物址(第21・59図)

調査区西南端で検出された。Ta1に切られ、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高0.18mの規模である。柱穴、周溝等は存在しない。

遺物は、土師器環と台環甕が各1点出土しているが、本址の時期を確定出来るものではない。

● Ta3号竪穴建物址(第22・59図)

H5とH9の間で検出された。D2に切られ、D8・9を切る。N-4°-Eに長軸方位をとり、長軸長2.64m、壁残高0.28mの規模である。柱穴、周溝等は存在しない。

遺物は、土師器環・甕、須恵器環、打製石斧が出土しているが、本址の時期を確定出来るものではない。

第3節 掘立柱建物址

● F1号掘立柱建物址(第23図)

調査区北端で検出された。H6・13に切られる。2間×3間の側柱の形態で、N-80°-Wに長軸方位をとり、桁行長4.22m、梁間長3.53m、平面積14.88㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

● F2号掘立柱建物址(第24図)

調査区中央やや北寄りで検出された。西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。検出範囲では他遺構との重複関係は有さない。2間×?間の側柱の形態と思われる。N-84°-Eに長軸方位をとり、梁間長3.70mの規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

第4節 土坑

● D1号土坑(第25・60図)

調査区中央南寄りで検出された。H4を切り、M1に切られる。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-43°-Wに長軸方位をとり、長軸長1.31m、短軸長1.23m、壁残高0.62m、面積0.26㎡の規模である。

遺物は、土師器と須恵器が出土している。土師器には環・椀の器種が認められる。環は内面に暗文を施す所謂「機内系暗文環」である。椀はロクロからの切り離しは回転系切で、内面にはヘラミガキ後黒色処理が施される。3は墨書が認められるが判読できない。須恵器は甕の口縁部片が1点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● D2号土坑(第26図)

D1の南側で検出された。Ta3、D7に切られる。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-10°-Eに長軸方位をとり、長軸長0.93m、短軸長0.81m、壁残高0.62m、面積0.22㎡の規模である。出土遺物は皆無であり本址の時期は不明である。

● D3号土坑(第27・60図)

H3の南側で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面不整形、断面逆梯形の形態である。N-0°-Eに長軸方位をとり、長軸長2.15m、壁残高0.15mの規模である。

遺物は、土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には環・甕の器種が認められる。環は底部を欠損する。甕はロクロ甕である。須恵器は環が2点出土している。ロクロからの切り離しは回転系切である。石器は磨石が1点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

● D4号土坑(第28図)

調査区中央で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N-11°-Eに長軸方位をとり、長軸長1.19m、短軸長0.76m、壁残高0.22m、面積0.54㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり本址の時期は不明である。

● D5号土坑(第29・60図)

D4の南で検出された。M1に切られる。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-0°-Eに長軸方位をとり、長軸長2.83m、短軸長2.19m、壁残高0.23mの規模である。

遺物は、土師器、灰釉陶器が出土している。土師器には環・甕の器種が認められる。環のロクロからの切り離しは回転系切で、内面に黒色処理は施されない。甕は同一個体と思われるもので、判読出

来ない刻書文字が認められる。灰軸陶器は碗が1点出土した。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。

● D6号土坑(第30・60図)

調査区南端で検出された。H1に切られる。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。短軸長1.20m、壁残高0.30mの規模である。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。土師器は回転糸切で、内面ヘラムガキ後黒色処理が施される碗が1点出土した。須恵器は底部右回転糸切の坏と、坏蓋片が出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅶ期に比定され、10世紀前半の実年代が想定される。

● D7号土坑(第31図)

D2に切られる。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-10°-Eに長軸方位をとり、長軸長1.19m、壁残高0.17mの規模である。

出土遺物は皆無であり本址の時期は不明である。

● D8号土坑(第32図)

Ta3,D2に切られる。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N-80°-Wに長軸方位をとり、長軸長1.53m、短軸長0.76m、壁残高0.25mの規模である。

出土遺物は皆無であり本址の時期は不明である。

● D9号土坑(第33・60図)

Ta3,D2・8に切られる。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N-90°-Wに長軸方位をとり、短軸長1.75m、壁残高0.08mの規模である。

遺物は、9世紀代のものと思われる土師器武蔵甕の体部が1点出土した。

● D10号土坑(第34・60図)

調査区南端付近で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-11°-Eに長軸方位をとり、長軸長0.94m、短軸長0.79m、壁残高0.2m、面積0.34㎡の規模である。

遺物は、底部に右回転糸切を残し、内面ヘラムガキ後黒色処理が施される土師器坏底部が1点出土している。9世紀代の所産である。

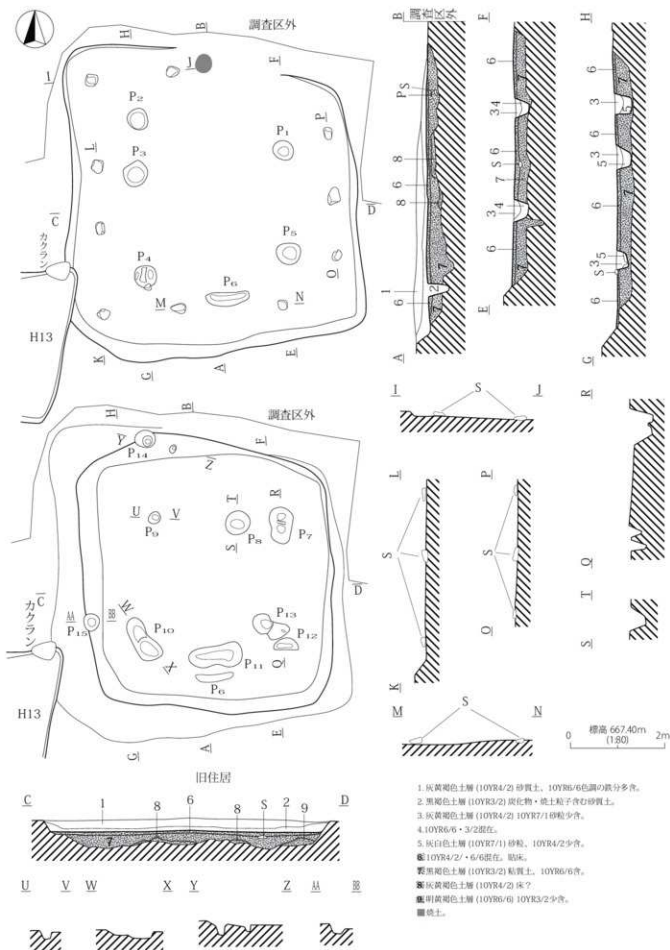
● D11号土坑(第35図)

調査区南端付近で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N-31°-Eに長軸方位をとり、長軸長0.81m、短軸長0.50m、壁残高0.28m、面積0.13㎡の規模である。

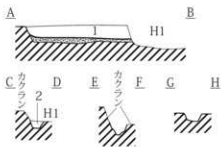
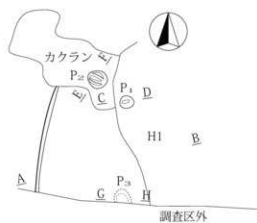
出土遺物は皆無であり本址の時期は不明である。

● D12号土坑(第36・60図)

調査区中央付近で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N-18°-Eに長軸方位をとり、長軸長0.85m、短軸長0.49m、壁残高0.16m、面積0.19㎡の規模である。

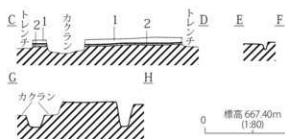
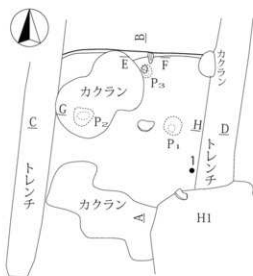


第8図 H6号住居址



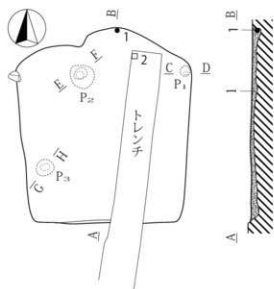
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 軽石・砂利少含、炭化物・10YR6/1極少含。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) ϕ 1~2m大10YR6/6軽子含。
- 掘削方。

第9図 H7号住居址



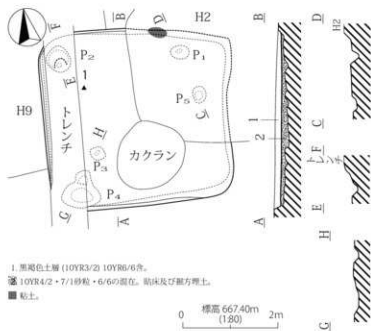
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 炭化物・10YR6/6少含。
2. 暗灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6多含。掘削方土。

第10図 H8号住居址



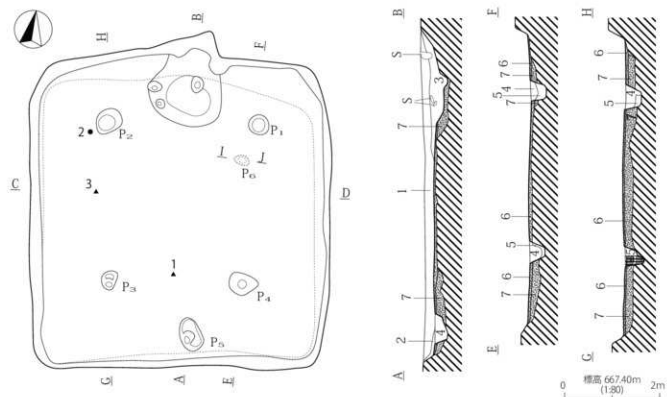
- 掘削方土。
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6含。
 2. 10YR4/2・7/1砂粒・6/6の層在。筋床及び掘方埋土。
- 粘土。

第11図 H9号住居址



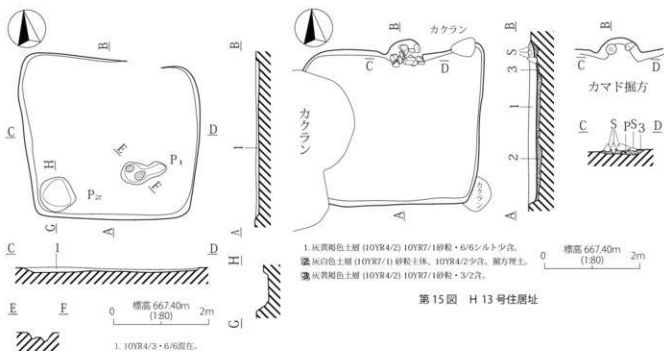
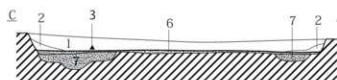
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6含。
 2. 10YR4/2・7/1砂粒・6/6の層在。筋床及び掘方埋土。
- 粘土。

第13図 H11号住居址



- 1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 砂質土、10YR7/1砂粒少含。
- 2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 砂質土、10YR7/1砂粒多含。
- 3. 2層中に粘土・炭化物含。
- 4. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/2砂粒少含。
- 5. 明黄褐色土層 (10YR6/6) シルト、10YR7/2砂粒少含。
- 6. 濃黄褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/1砂粒極少含、粘土。
- 7. 灰白色土層 (10YR7/1) 砂粒、10YR4/2・2/2・6/6含、掘方埋土。
- 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 柱敷。

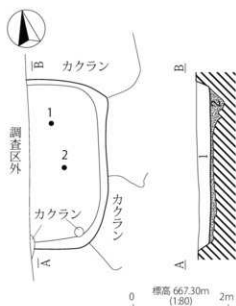
第12図 H 10号住居址



- 1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒・6/6シルト少含。
- 2. 灰白色土層 (10YR7/1) 砂粒主体、10YR4/2少含、掘方埋土。
- 3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒・3/2含。

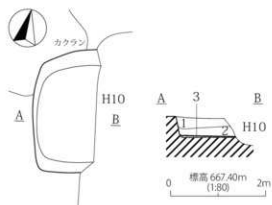
第15図 H 13号住居址

第14図 H 12号住居址



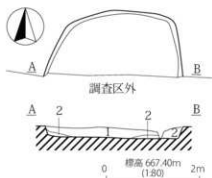
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6シルト・炭化物含。
 2. 10YR3/2・6/6混在。炭化物含。粘床及び掘方埋土。

第16図 H14号住居址



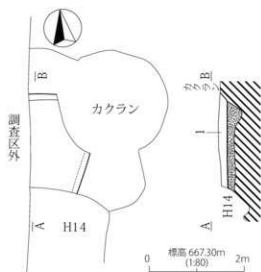
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒多含。
 2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒多含。Z/2少含。
 3. 霰灰白色土層 (10YR7/1) 砂粒主体。10YR4/2少含。掘方埋土。

第17図 H15号住居址



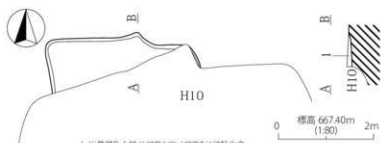
1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR3/2・6/3粘粒含。
 2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂質土。

第20図 Ta1号竪穴建物址



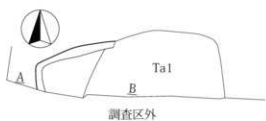
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6シルト少含。
 2. 掘方。

第18図 H16号住居址



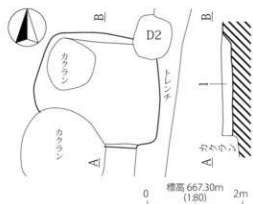
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒少含。

第19図 H17号住居址



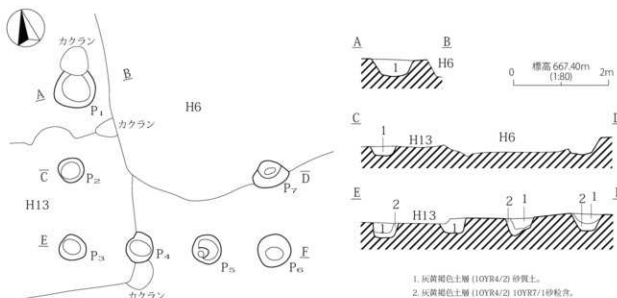
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂質土。

第21図 Ta2号竪穴建物址

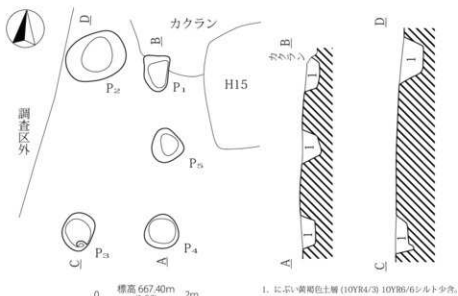


1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR6/4粘子少含。

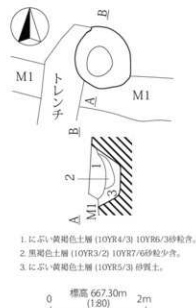
第22図 Ta3号竪穴建物址



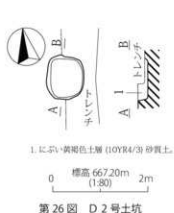
第23図 F1号掘立柱建物址



第24図 F2号掘立柱建物址



第25図 D1号土坑



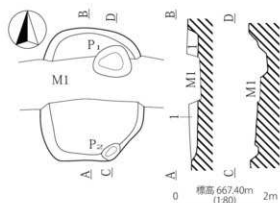
第26図 D2号土坑



第27図 D3号土坑

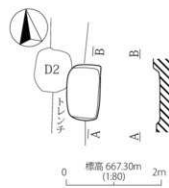


第28図 D4号土坑

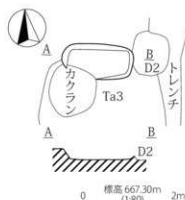


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6・2/2少含。

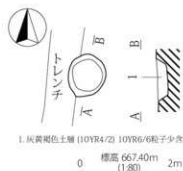
第29図 D5号土坑



第31図 D7号土坑

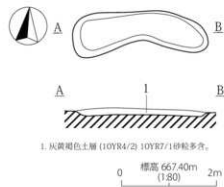


第32図 D8号土坑



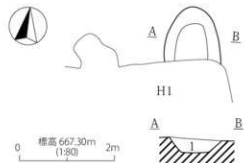
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/6砂粒少含。

第34図 D10号土坑



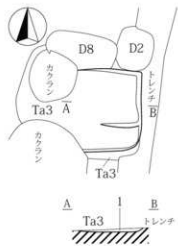
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒多含。

第37図 D13号土坑



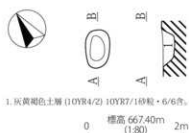
1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR6/6砂子・炭化物含。

第30図 D6号土坑



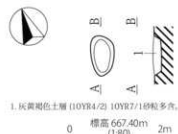
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒多含。

第33図 D9号土坑



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒・6/6含。

第35図 D11号土坑



1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/1砂粒多含。

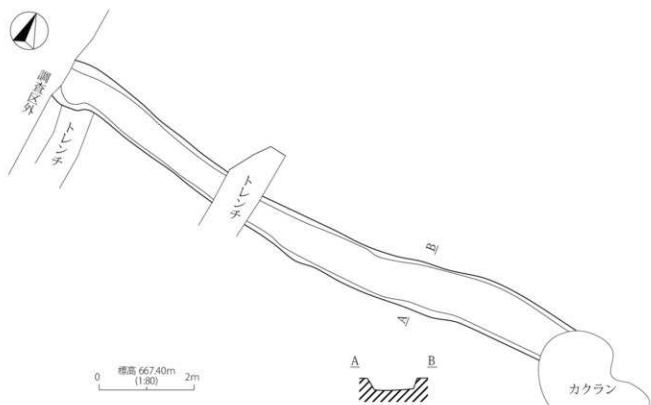
第36図 D12号土坑

遺物は、底部を欠損する内外面口クロナデの土師器破片が1点出土している。10世紀代の所産であろう。

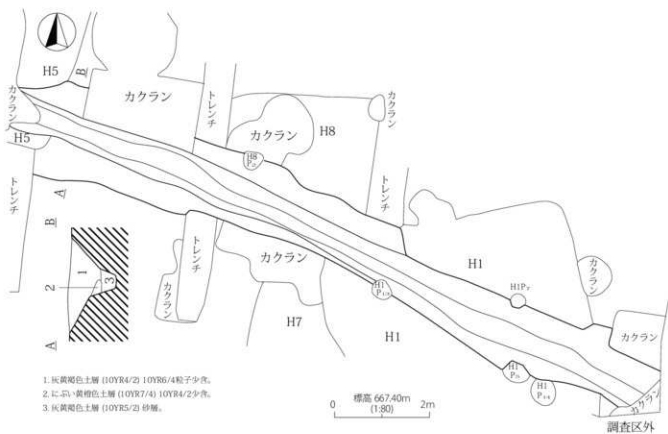
● D13号土坑 (第37・60図)

調査区中央付近で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面不整形、断面逆梯形の形態である。N-86°-Eに長軸方位をとり、長軸長2.85m、短軸長0.92m、壁残高0.11m、面積1.34㎡の規模である。

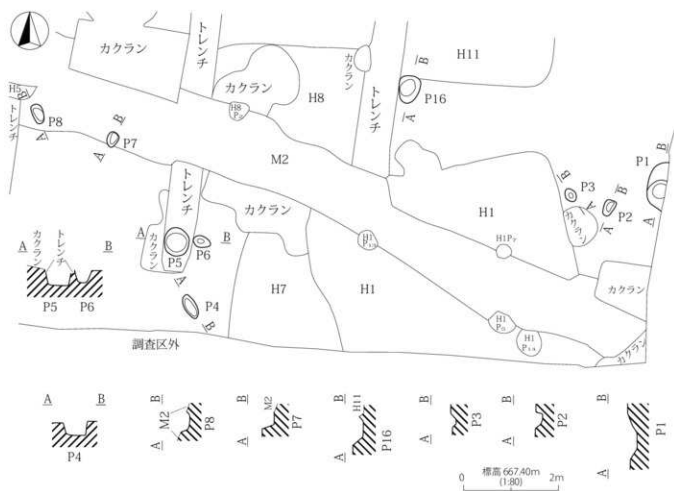
遺物は、回転糸切でロクロから切り離された。付高台、内面ヘラミガキ後黒色処理の土師器破片が1点出土している。9世紀代の所産であろう。



第38図 M1号溝址



第39図 M2号溝址



第40図 ビット(1)

第4節 溝址

● M1号溝址(第38・63図)

調査区中央やや南寄りで検出された。H4、D1・5を切る。最大長 12.02m、最大幅 1.12m、最大深度 0.26mの規模である。西から東に向かい緩やかに傾斜している。

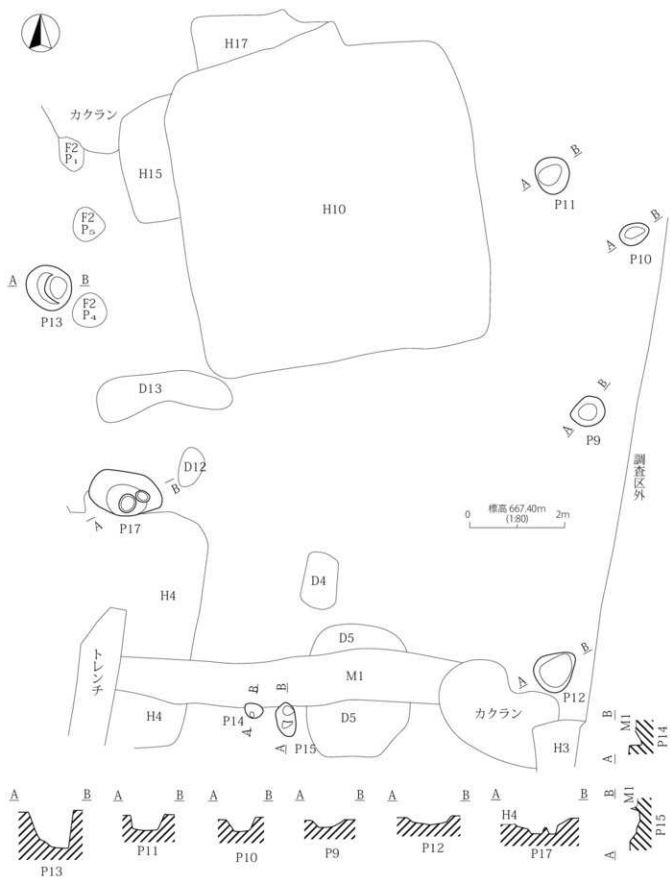
遺物は土師器と軽石製品が出土している。土師器には坏・碗・甕の器種が認められる。坏は口縁部の小破片であるが、判読不可能な墨書が認められる。碗は全てロクロからの切り離しは回転糸切である。内面は、ヘラミガキ後黒色処理が施される。甕は武蔵甕とロクロ甕が各1点出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

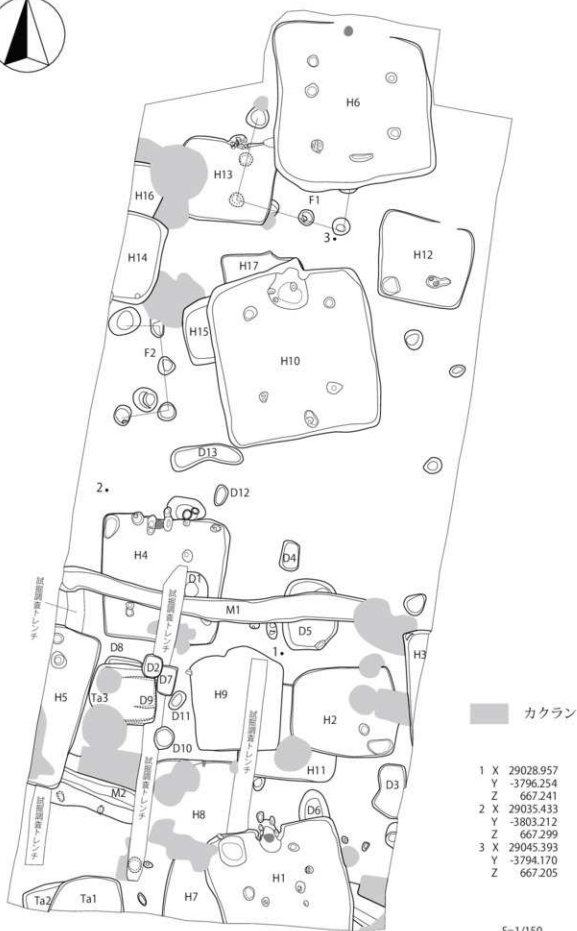
● M2号溝址(第39・63図)

調査区南端で検出された。H1・5・8に切られる。最大長 14.72m、最大幅 1.45m、最大深度 0.94mの規模であり、西から東に向かい傾斜している。断面は「V」字を呈する。

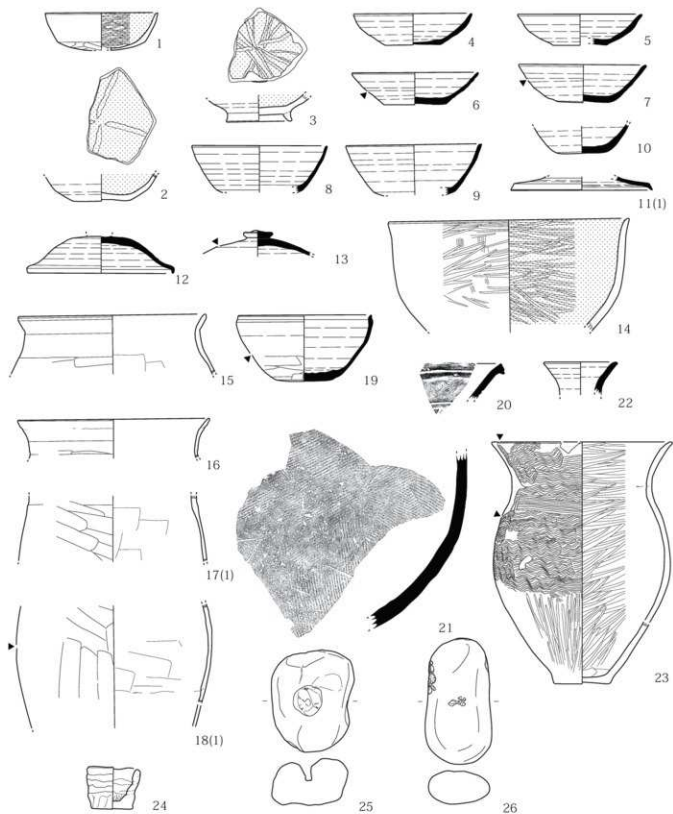
遺物は弥生土器と石器が出土している。弥生土器は全て後期箱清水式期のものである。器種的には甕・壺・手捏が認められる。甕は頸部文様帯の籠状文は同じであるが、口縁部と体部に櫛描波状文を



第41図 ビット(2)



第 42 図 根々井居屋敷遺跡全体図



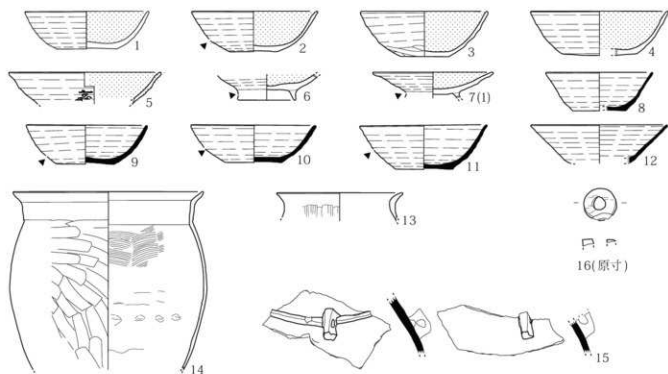
第43図 H1号住居址出土遺物



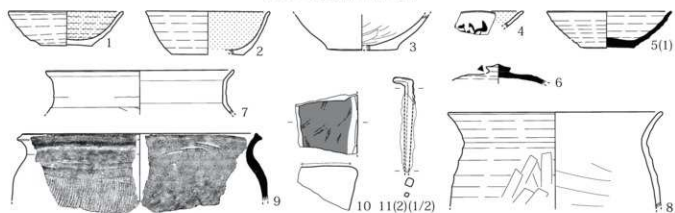
第45図 H3号住居址出土遺物



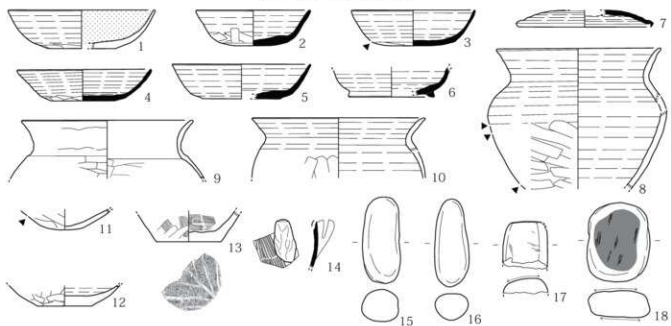
第47図 H5号住居址出土遺物



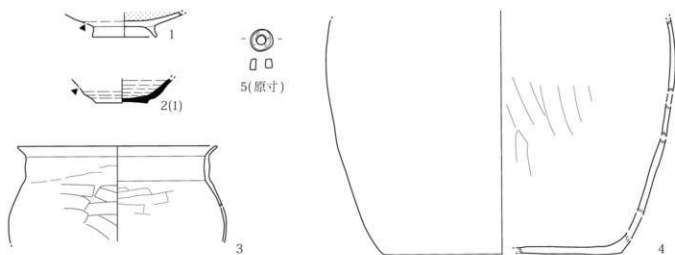
第44图 H2号住居址出土遗物



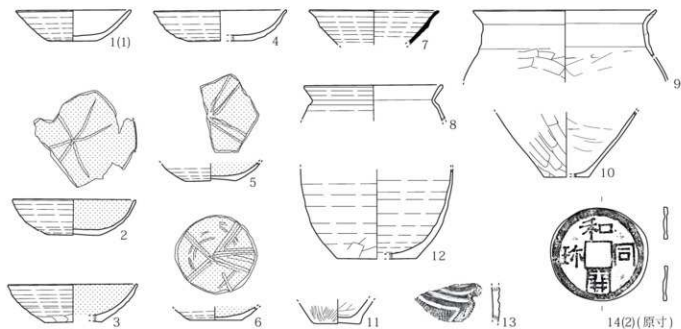
第46图 H4号住居址出土遗物



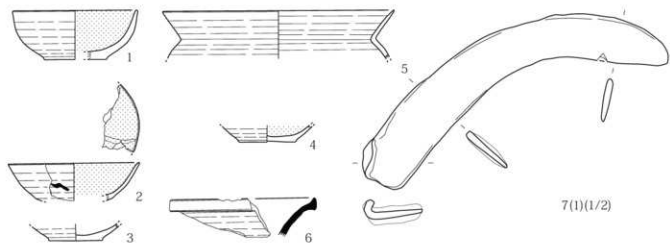
第48图 H6号住居址出土遗物



第49図 H8号住居址出土遺物



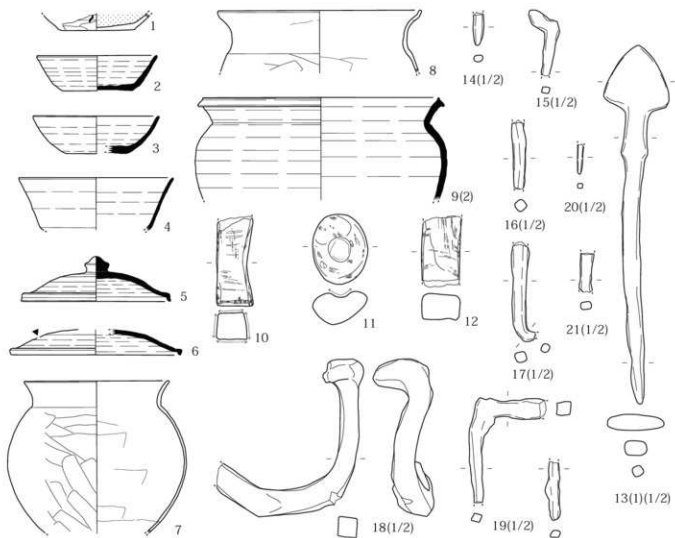
第50図 H9号住居址出土遺物



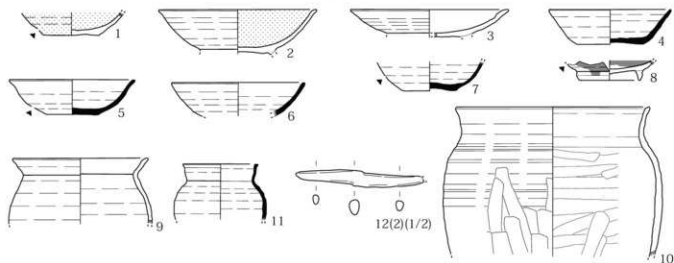
第52図 H11号住居址出土遺物



第53図 H12号住居址出土遺物



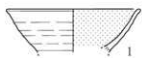
第 51 图 H10 号住居址出土遗物



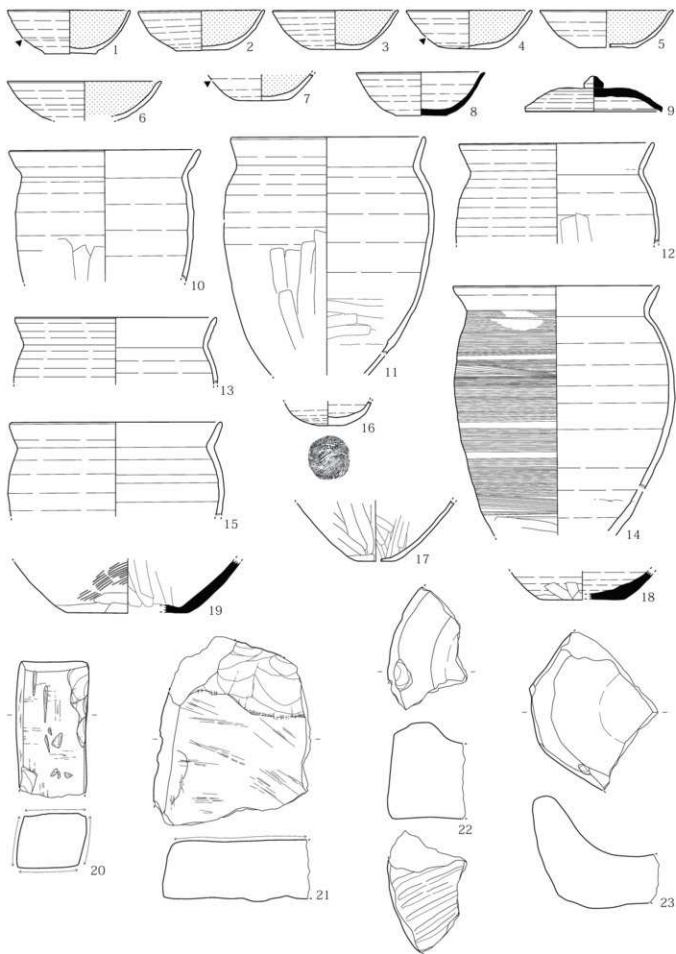
第 55 图 H14 号住居址出土遗物



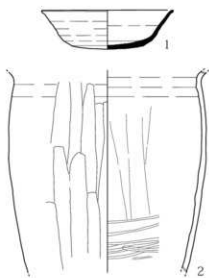
第 56 图 H15 号住居址出土遗物



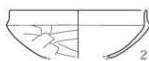
第 58 图 H17 号住居址出土遗物



第54図 H13号住居址出土遺物



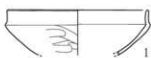
第57図 H16号住居址出土遺物



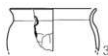
Ta1



3(原寸)



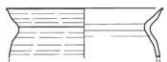
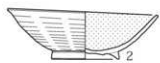
Ta2



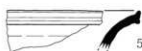
Ta3



第59図 竪穴建物址出土遺物



D3



D1



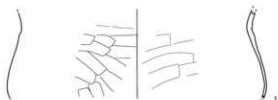
D5



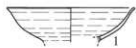
D6



D10



D9



D12



D13

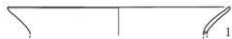
第60図 土坑出土遺物



P1

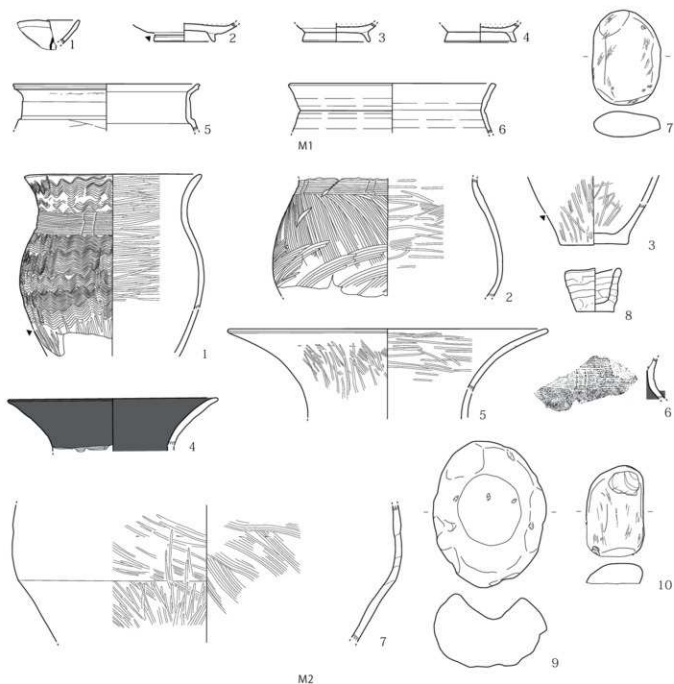


P10

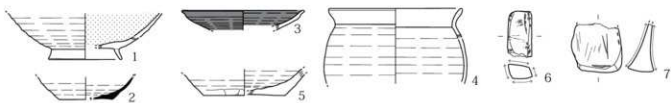


P13

第62図 ビット出土遺物



第 61 図 溝址出土遺物



第 63 図 遺構外出土遺物

住居社計測表

遺構名	重複関係	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	ビット	付属施設	備	考	時期
H 1	H7・8、D6、M2を切る	N-10°-W	-	5.48	0.29	-	(14)	カマド	-	-	-
H 2	H11を切る	N-90°-E	(4.27)	3.61	0.23	-	(2)	-	-	-	-
H 3	-	-	-	-	0.31	-	-	-	-	-	-
H 4	D1、M1に切られる	N-0°-W	4.91	4.87	0.18	-	(14)	カマド	-	-	-
H 5	M2を切る	N-16°-E	6.25	-	0.30	-	(2)	-	-	-	-
H 6	H13に切られ、F1を切る	N-0°-W	6.63	6.29	0.34	-	(15)	カマド、礎石	建て替え	-	-
H 7	H1に切られる	-	-	-	0.25	-	-	-	-	-	-
H 8	M2を切る	-	-	-	0.16	-	(3)	-	-	-	-
H 9	H11を切る	N-0°-W	3.79	3.54	0.07	-	(3)	-	-	-	-
H 10	H17・15を切る	N-10°-W	6.55	6.36	0.36	36.84	(5)	カマド	建て替え	-	-
H 11	H9・12に切られる	N-5°-E	3.76	3.54	0.13	-	(5)	カマド	-	-	-
H 12	-	N-79°-W	3.71	3.36	0.13	11.01	2	-	-	-	-
H 13	H6を切る	N-3°-E	3.33	-	0.18	-	-	カマド	-	-	-
H 14	H16を切る	-	-	-	0.30	-	-	-	-	-	-
H 15	H10に切られる	-	-	-	0.35	-	-	-	-	-	-
H 16	H14に切られる	-	-	-	0.16	-	-	-	-	-	-
H 17	H10に切られる	-	-	-	0.09	-	-	-	-	-	-

竪穴建物社計測表

遺構名	重複関係	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	ビット	付属施設	備	考	時期
Ta 1	Ta 2を切る	-	-	-	0.21	-	-	-	-	-	-
Ta 2	Ta 1に切られる	-	-	-	0.18	-	-	-	-	-	-
Ta 3	D2に切られ、D8・9を切る	N-4°-E	2.64	-	0.28	-	-	-	-	-	-

掘立柱建物社計測表

遺構名	重複関係	長軸方位	桁行長	梁間長	面積	柱直径	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	備	考
F 1	H6・13に切られる	N-80°-W	4.22	3.53	14.88	-	1.30～1.55	1.73～1.80	-	-
F 2	-	N-84°-E	-	3.70	-	-	-	1.64～2.06	-	-

土坑計測表(1)

遺構名	重複関係	平面形態	長軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	備	考
D 1	H4を切り、M1に切られる	楕円形	N-43°-W	1.31	1.23	0.62	0.26	-	-
D 2	Ta3、D7を切る	楕円形	N-10°-E	0.93	0.81	0.22	0.48	-	-

土坑計測表(2)

遺構名	重複関係	平面形態	長軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	備	考
D 3	—	不整形	N-0°-E	2.15	—	0.15	—	—	—
D 4	—	長方形	N-11°-E	1.19	0.76	0.22	0.54	—	—
D 5	M1に切られる	楕円形	N-0°-E	2.83	2.19	0.23	—	—	ピット之基
D 6	H1に切られる	楕円形	—	—	1.20	0.30	—	—	—
D 7	M1に切られる	楕円形	N-10°-E	1.19	—	0.17	—	—	—
D 8	Ta3、D2に切られる	長方形	N-80°-W	1.53	0.76	0.25	—	—	—
D 9	Ta3、D2・8に切られる	長方形	N-90°-E	—	1.75	0.08	—	—	—
D 10	—	楕円形	N-11°-E	0.94	0.79	0.20	0.34	—	—
D 11	—	長方形	N-31°-E	0.81	0.50	0.28	0.13	—	—
D 12	—	楕円形	N-18°-E	0.85	0.49	0.16	0.19	—	—
D 13	—	不整形	N-86°-E	2.85	0.92	0.11	1.34	—	—

ピット計測表

遺構名	重複関係	平面形態	長軸長	短軸長	壁残高	土	色	遺構名	重複関係	平面形態	長軸長	短軸長	壁残高	土	色
P 1	—	—	—	—	0.21	10YR3/2、10YR6/4以上	—	P 10	P7に切られる	楕円形	0.65	0.48	0.34	10YR4/2、10YR6/6	赤
P 2	—	楕円形	0.36	0.22	0.15	10YR2/2、10YR6/6少	—	P 11	—	楕円形	0.79	0.71	0.34	10YR4/2、10YR6/6	赤
P 3	—	楕円形	0.31	0.23	0.12	10YR4/2、10YR6/6少	—	P 12	—	楕円形	0.99	0.42	0.19	10YR4/2、10YR6/6	赤
P 4	—	楕円形	0.53	0.26	0.30	10YR2/2、10YR4/2少・6.6層少	—	P 13	—	楕円形	0.94	0.93	0.81	10YR4/2、10YR6/6多・7/10層少	赤
P 5	—	楕円形	0.59	0.52	0.36	10YR2/2、10YR4/2少・6.6層少	—	P 14	—	楕円形	0.40	0.32	0.25	10YR4/2、10YR7/10層少	赤
P 6	—	楕円形	0.39	0.24	0.28	10YR2/2、10YR4/2少・6.6層少	—	P 15	M1に切られる	楕円形	0.71	0.41	0.23	10YR4/2、10YR7/10層少	赤
P 7	M2に切られる	楕円形	0.32	0.25	0.28	10YR2/2、10YR4/2少・6.6層少	—	P 16	H1に切られる	楕円形	0.58	0.44	0.25	10YR4/2、10YR7/10層少	赤
P 8	M2に切られる	楕円形	0.43	0.23	0.20	10YR2/2、10YR4/2少・6.6層少	—	P 17	H4に切られる	楕円形	1.56	0.91	0.35	10YR4/2、10YR7/10層少	赤
P 9	—	楕円形	0.73	0.64	0.18	10YR2/2、10YR6/6多	—								

溝計測表

遺構名	重複関係	最大長	最大幅	最大深	備	考
M 1	H4、D1・5、P14・15を切る	12.02	1.12	0.26	—	—
M 2	H1・5・8に切られる	14.72	1.45	0.94	—	—

H1号住居址出土遺物観察表

No.	器種	器形	法		量		内面	成形・調整	備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等				
1	土師器	環	(12.0)	(9.2)	4.0	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転皮剥	I区
2	土師器	環	(6.0)	(6.0)	<2.8>	—	暗文→黒色処理	右回転糸切	回転皮剥	ケン
3	土師器	楕	(7.0)	(7.0)	<2.8>	—	暗文→黒色処理	回転糸切→付高台	回転皮剥	ケン
4	須恵器	環	(12.6)	(6.0)	(3.3)	—	ロクロナデ	回転糸切	回転皮剥	II区
5	須恵器	環	(13.2)	(5.8)	(3.3)	—	ロクロナデ	回転糸切	完全皮剥	II区
6	須恵器	環	(13.5)	6.6	3.4	—	火傷	右回転糸切・火傷	完全皮剥	II区
7	須恵器	環	(13.6)	6.0	4	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転皮剥	II区
8	須恵器	環	(14.4)	—	<5.0>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転皮剥	II区
9	須恵器	環	(14.4)	—	<5.4>	—	ロクロナデ	右回転糸切・火傷	回転皮剥	II区
10	須恵器	環	(5.8)	—	<3.0>	—	ロクロナデ	回転糸切	回転皮剥	II区
11	須恵器	環蓋	(13.6)	—	<1.5>	—	ロクロナデ	回転糸切	完全皮剥	No1
12	須恵器	環蓋	14.9	—	<4.0>	—	ロクロナデ	回転糸切	完全皮剥	II区
13	須恵器	環蓋	—	—	<2.7>	—	ロクロナデ	回転糸切	完全皮剥	I区
14	土師器	鉢	(25.6)	—	<11.9>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転皮剥	II区
15	土師器	武蔵饗	(20.0)	—	<6.4>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転皮剥	II区
16	土師器	武蔵饗	(20.4)	—	<4.1>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転皮剥	覆土
17	土師器	武蔵饗	—	—	<6.9>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転皮剥	No1
18	土師器	武蔵饗	—	—	<13.1>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全皮剥	No1
19	須恵器	鉢	(14.2)	6.0	7.0	—	ロクロナデ	彫削皮状文	完全皮剥	II区
20	須恵器	鉢	—	—	—	—	ロクロナデ	彫削皮状文	完全皮剥	II区
21	須恵器	鉢	—	—	—	—	当目類	目目	破片皮剥・拓本	II区
22	須恵器	平盤	(7.8)	—	<3.5>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転皮剥	II区
23	赤土土器	環	19.2	6.0	25.7	—	ヘラミガキ	彫削皮状文・脚面状文・ハケ目→ヘラミガキ	完全皮剥	II区・M2
24	赤土土器	手押土器	5.6	4.4	4.5	—	ナデ	ナデ	完全皮剥	P2
25	石器	凹石	10.8	8.8	5.5	498.5	凹径 3.2 × 3.0、凹深 2.2	凹径3.2 × 3.0、凹深2.2	完全皮剥	II区
26	石器	凹物石	13.4	7.2	3.8	478.0	緑辺と正面に使用痕	ナデ	完全皮剥	II区

H2号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	器形	法		量		内面	成形・調整	備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等				
1	土師器	環	(13.2)	(6.4)	4.0	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	回転皮剥	II区
2	土師器	環	(13.4)	5.0	4.3	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全皮剥	II区
3	土師器	環	13.5	5.0	4.8	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切・底彫・周縁ヘラケズリ	完全皮剥	P1
4	土師器	環	(14.6)	(8.0)	4.7	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転皮剥	ケン
5	土師器	環	(16.2)	—	<3.4>	—	ヘラミガキ→黒色処理	磨蓋	回転皮剥	ケン・II区
6	土師器	楕	—	—	<2.8>	—	ヘラミガキ→黒色処理	付高台	完全皮剥	II区
7	土師器	皿	12.8	—	<2.8>	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切→付高台	完全皮剥	No1・IV区
8	須恵器	環	(11.4)	(5.6)	4.1	—	ロクロナデ	回転糸切	回転皮剥	II区
9	須恵器	環	(12.9)	6.0	4.2	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全皮剥	II区
10	須恵器	環	(13.3)	5.9	4.0	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全皮剥	II・IV区
11	須恵器	環	(13.6)	6.1	4.7	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全皮剥	II区
12	須恵器	環	(14.6)	—	<4.1>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転皮剥	IV区

H 2号住居出土遺物観察表(2)

No	器種	器形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
13	土師器	環(東海系)	(13.4)	—	—	ナデ	ハケナデ	同転灰洲	Ⅲ区
14	土師器	武蔵系	(20.2)	—	<18.9>	ハケ目→ナデ	ハラケズリ	同転灰洲	Ⅳ区・P1
15	須臾器	白磁 2(白磁)	—	—	—	ナデ	ナデ、凸部耳留付、耳欠損	破片灰洲	Ⅳ区・P1
16	石製品	白玉	<0.90>	<0.85>	<0.25>	<0.22>	孔径0.35、下部→裏面欠損	完全灰洲	Ⅲ区

H 3号住居出土遺物観察表

No	器種	器形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	須臾器	有台杯	(14.0)	—	<1.4>	ロクロナデ	ロクロナデ→付蓋台	同転灰洲	ケン
2	土師器	甕	—	(5.0)	<2.5>	ハラナデ	ハラナデ	同転灰洲	覆土

H 4号住居出土遺物観察表

No	器種	器形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	環	12.2	5.4	3.7	黒色処理	右同転糸切	完全灰洲	1区ホリ
2	土師器	環	(13.2)	(7.6)	4.6	ハラミガキ→黒色処理	同転糸切	同転灰洲	Ⅲ区
3	土師器	環	—	(7.4)	<3.8>	ハラナデ	ナデ	同転灰洲	Ⅲ区ホリ
4	土師器	皿	—	—	—	ハラミガキ→黒色処理	縁書	破片灰洲	1区
5	須臾器	環	(13.2)	5.7	3.9	ロクロナデ	右同転糸切	完全灰洲	No1
6	須臾器	蓋	—	—	<2.1>	ロクロナデ	同転ハラケズリ、つまみ取付	完全灰洲	1区ホリ
7	土師器	武蔵系	(20.0)	—	<4.7>	ナデ	ハラケズリ	同転灰洲	カマド・ケン・1区
8	土師器	ロクロ口蓋	(22.8)	—	<10.3>	ナデ	ハラケズリ	同転灰洲	1区ホリ
9	須臾器	甕	(24.8)	—	<7.2>	当耳紐	平行四角	同転灰洲・拵木	1区
10	石器	磨石	<6.4>	<6.6>	<294.0>	右側以外欠損、磨面1	—	完全灰洲	ケン
11	鉄製品	角釘	<10.1>	<1.0>	<0.7>	<36.0>	先端欠損	完全灰洲	No2

H 5号住居出土遺物観察表

No	器種	器形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	環	(17.2)	(11.2)	4.3	ハラミガキ→黒色処理	底部ハラケズリ→ハラミガキ	同転灰洲	覆土
2	土師器	甕	—	(3.6)	<2.2>	割離	ハラケズリ	同転灰洲	覆土
3	土師器	ミニチュア土器	(6.5)	3.1	4.2	ナデ、下部ハケ目	ナデ、下部ハラケズリ	完全灰洲	覆土
4	石器	磨石	3.1	2.8	0.4	6.7	全体に傷り	完全灰洲	覆土

H 6号住居出土遺物観察表(1)

No	器種	器形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	環	(15.6)	(7.2)	4.1	ハラミガキ→黒色処理	ハラケズリ、火押紐?	同転灰洲	1区ホリ
2	須臾器	環	(12.2)	(7.0)	3.8	ロクロナデ	ハラケズリ	同転灰洲	1区ホリ
3	須臾器	環	(13.1)	8.8	3.8	ロクロナデ	ハラケズリ	完全灰洲	Ⅲ区ホリ
4	須臾器	環	14.3	6.7	3.4	ロクロナデ	ハラケズリ	完全灰洲	1区・1区ホリ
5	須臾器	環	(14.8)	(8.2)	3.7	ロクロナデ	同転糸切	同転灰洲	1区ホリ

H 6号住居出土土遺物観察表(2)

No	器種	器形	法		重量	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
6	須臾器	有台杯	—	(9.0)	—	付高台	回転支脚	II区	
7	須臾器	蓋	(14.0)	—	<3.2>	口クロナデ	回転ヘラケズリ	II区ホリ	
8	土師器	口ク口裏	17.5	—	(15.0)	口クロナデ	下部ヘラケズリ	I・II区、I区ホリ、ケ	
9	土師器	武蔵鏡	(18.2)	—	<6.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ、下部ヘラケズリ	I区ホリ	
10	土師器	口ク口裏	(18.2)	—	<6.4>	煤付着	ヘラケズリ	II区ホリ	
11	土師器	武蔵鏡	—	4.0	<2.2>	ナデ	ヘラケズリ	III区	
12	土師器	口ク口裏	—	(5.8)	<2.2>	煤付着	ヘラケズリ	III区	
13	土師器	裏	—	(6.8)	<3.3>	ハケ目	ハケ目→ナデ、木炭痕	III区	
14	須臾器	四耳蓋	—	—	—	ナデ	目上部に串丸、平行四角	III区ホリ	
15	石器	編物石	9.2	4.1	3.4	198.0	—	III区ホリ	
16	石器	編物石	9.3	3.7	2.9	128.9	—	III区ホリ	
17	石器	磨石	<5.1>	<4.8>	<1.8>	<51.4>	下部→裏面穴粗、断面1	III区ホリ	
18	石器	磨石	8.4	6.7	3.2	269.0	背面2	III区ホリ	

H 8号住居出土土遺物観察表

No	器種	器形	法		重量	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	皿	—	6.6	<2.6>	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→付高台	完全支脚	I区
2	須臾器	杯	—	5.5	<2.6>	口クロナデ	右回転糸切	完全支脚	No1
3	土師器	武蔵鏡	(21.2)	—	<10.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	回転支脚	I・II区、II区ホリ
4	土師器	土師器	—	(25.4)	<25.1>	ヘラナデ	ナデ	回転支脚	II区
5	石製品	白玉	0.55	0.55	0.25	0.12孔φ0.25	—	完全支脚	III区

H 9号住居出土土遺物観察表

No	器種	器形	法		重量	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	杯	12.3	5.0	3.3	煤付着	右回転糸切、煤付着	完全支脚	No1
2	土師器	杯	(13.1)	5.5	3.8	暗文→黒色処理	右回転糸切、火焼	完全支脚	砂・ケン
3	土師器	杯	(13.8)	(6.0)	(4.0)	ヘラミガキ→黒色処理	底部→周縁ヘラケズリ	回転支脚	カクラン
4	土師器	杯	(14.2)	(6.8)	(3.2)	ナデ	右回転糸切	回転支脚	ケン
5	土師器	杯	—	(5.2)	<1.9>	暗文→黒色処理	ヘラケズリ?	回転支脚	覆土
6	土師器	杯	—	5.5	<1.4>	暗文→黒色処理	右回転糸切	完全支脚	覆土
7	須臾器	杯	(13.8)	—	<3.7>	ナデ	口クロナデ	回転支脚	覆土
8	土師器	口ク口裏	(14.8)	—	<3.8>	ナデ	口クロナデ	回転支脚	覆土
9	土師器	武蔵鏡	(19.4)	—	<7.7>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転支脚	ケン・カクラン
10	土師器	武蔵鏡	—	(4.6)	<6.9>	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支脚	覆土
11	土師器	裏	—	4.8	<2.6>	ヘラナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	完全支脚	ケン
12	土師器	口ク口裏	—	(8.2)	<9.5>	口クロナデ	回転糸切→周縁ヘラケズリ	回転支脚	覆土
13	弥生土器	壺	—	—	—	ナデ	洗擦文、刺文	破片支脚・拓本	覆土
14	瀬製品	占瓦	2.5	—	0.1	2.0	(和同開珎)	完全支脚	No2

H 10 寄住原址出土遺物調査表

No	器種	器形	法		重量等	内面		成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		器高(厚)	重量等	内面	外面		
1	土師器	杯	—	(8.0)	<1.9>	—	ロクロナデ、黒色鬼理	ロクロナデ、黒書	回転式測	ケ	ケ
2	須恵器	杯	(12.8)	(7.4)	3.8	—	ロクロナデ、火押痕	ロクロナデ、火押痕	回転式測	II区	II区
3	須恵器	杯	(13.4)	(6.4)	(4.0)	—	ロクロナデ、火押痕	ロクロナデ、火押痕、回転糸切	回転式測	II区	II区
4	須恵器	有台杯	(16.4)	—	<5.6>	—	ロクロナデ、火押痕	ロクロナデ	回転式測	II・III区ケン	II・III区ケン
5	須恵器	杯蓋	14.8	—	4.8	—	ロクロナデ	ロクロナデ、つまみ足付、回転ヘラケズリ	完全式測	W区	W区
6	須恵器	杯蓋	17.3	—	<2.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	完全式測	I区ホリ・II区	I区ホリ・II区
7	土師器	武蔵蓋	(15.4)	—	<16.2>	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転式測	II区	II区
8	土師器	武蔵蓋	(21.6)	—	<6.7>	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転式測	H10 II区・H15N平	H10 II区・H15N平
9	土師器	蓋	(25.0)	—	<10.9>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転式測	No2	No2
10	石器	砥石	<9.5>	<3.9>	<3.0>	<187.8>	上部欠損、砥面数4	上部欠損、砥面数4	完全式測	II区	II区
11	石器	凹石	7.4	5.9	3.3	58.8	凹径2.6×2.4、凹深0.6、全体に磨、軽石質	凹径2.6×2.4、凹深0.6、全体に磨、軽石質	完全式測	II区	II区
12	石器	磨石	<7.5>	<4.3>	<2.9>	<178.3>	両端欠損、全体に磨	両端欠損、全体に磨	完全式測	I区ホリ	I区ホリ
13	鉄器	短頭鍔	19.1	3.5	0.85	44.8	錆跡付で本体のサイズ不明	錆跡付で本体のサイズ不明	完全式測	II区No1	II区No1
14	鉄器	角打	<1.8>	<0.5>	<0.61>	<0.61>	上部欠損	上部欠損	完全式測	ケ	ケ
15	鉄器	角打	<2.0>	<0.6>	<4.9>	<4.9>	下部欠損	下部欠損	完全式測	I区	I区
16	鉄器	角打	<3.6>	<0.6>	<3.4>	<3.4>	両端欠損	両端欠損	完全式測	ケ	ケ
17	鉄器	角打	<5.3>	<0.8>	<6.4>	<6.4>	両端欠損	両端欠損	完全式測	IV区	IV区
18	鉄器	角打	<8.3>	頭部1.5 輪1.0	1.0	<65.2>	先端欠損、折れ曲がる	先端欠損、折れ曲がる	完全式測	I区	I区
19	鉄器	鍔	<5.6>	<4.1>	<0.9>	<13.1>	両端欠損、上部欠損分、同一側体小	両端欠損、上部欠損分、同一側体小	完全式測	I区	I区
20	鉄器	角輪	<1.6>	<0.3>	<0.3>	<0.22>	上部欠損	上部欠損	完全式測	I区	I区
21	鉄器	角輪	<2.1>	<0.6>	<0.5>	<1.43>	両端欠損	両端欠損	完全式測	I区	I区

H 11 寄住原址出土遺物調査表

No	器種	器形	法		重量等	内面		成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		器高(厚)	重量等	内面	外面		
1	土師器	杯	(13.2)	(6.6)	(5.2)	—	ヘラミガキ→黒色鬼理	回転糸切	回転式測	W区ホリ	W区ホリ
2	土師器	杯	(14.0)	—	<4.0>	—	簡文→黒色鬼理	黒書「ウ」	回転式測	W区	W区
3	土師器	杯	(5.6)	(6.0)	<1.8>	—	ナデ	回転糸切	回転式測	H11内カクラン	H11内カクラン
4	土師器	杯	—	(6.0)	<1.8>	—	ヘラミガキ→黒色鬼理	右回転糸切	回転式測	W・E区	W・E区
5	土師器	口ケロコ	(24.6)	—	<5.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転式測	E区ホリ	E区ホリ
6	須恵器	蓋	—	—	—	—	自然釉付着	ロクロナデ	破片式測	W区ホリ	W区ホリ
7	鉄器	鍔	17.3	2.9	0.35	70.9	左用鍔	ロクロナデ	完全式測	No1	No1

H 12 寄住原址出土遺物調査表

No	器種	器形	法		重量等	内面		成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		器高(厚)	重量等	内面	外面		
1	土師器	杯	(13.4)	(5.6)	(4.3)	—	ヘラミガキ→黒色鬼理	回転糸切	回転式測	II区	II区
2	土師器	杯	(13.6)	5.3	5.0	—	ヘラミガキ→黒色鬼理	右回転糸切	完全式測	ケ	ケ
3	土師器	杯	(6.4)	<2.4>	<6.4>	—	ヘラミガキ→黒色鬼理	右回転糸切、黒書「7」	回転式測	ケ	ケ
4	須恵器	杯	(14.4)	(6.4)	(4.8)	—	ロクロナデ	回転糸切	回転式測	II区・ケン	II区・ケン
5	須恵器	杯	(14.4)	—	<4.4>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転式測	II区	II区

H 13 舟住原址出土遺物観察表

No.	器種	器形	口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内面	外面	備考	出土部位
1	土師器	環	(13.0)	5.5	4.6	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全美調	カマド
2	土師器	環	13.4	5.6	4.2	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全美調	カマド
3	土師器	環	13.4	5.7	4.2	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全美調	カマド
4	土師器	環	(13.4)	6.4	4.1	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→回転ヘラケズリ	完全美調	カマド
5	土師器	環	(14.2)	(6.6)	(4.0)	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	回転美調	カマド・E・E・ホリ
6	土師器	環	(16.4)	—	<4.2>	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	完全美調	カマド
7	土師器	環	—	6.0	<2.9>	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	完全美調	カマド・ケ
8	須恵器	環	(13.8)	5.5	4.6	—	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全美調	カマド
9	須恵器	杯蓋	(13.6)	—	3.8	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転美調	カマド
10	土師器	ロク口甕	(20.4)	—	<14.0>	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転美調	カマド
11	土師器	ロク口甕	(20.7)	—	<25.4>	—	ヘラナデ	ロクロナデ	回転美調	カマド
12	土師器	ロク口甕	(20.8)	—	<10.7>	—	ヘラナデ	ロクロナデ	回転美調	カマド
13	土師器	ロク口甕	(21.4)	—	<7.1>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	完全美調	カマド・E・E・ケ
14	土師器	ロク口甕	21.9	—	<24.6>	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	完全美調	カマド・E・E
15	土師器	ロク口甕	(22.6)	—	<10.0>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	完全美調	カマド・E・W・E
16	土師器	ロク口甕	—	4.3	<2.6>	—	ロクロナデ	ヘラ記号	完全美調	E・E
17	須恵器	武庫甕	—	(4.4)	<6.4>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転美調	カマド
18	須恵器	甕	—	(9.2)	<3.1>	—	ロクロナデ	底部・肩縁ヘラケズリ	回転美調	カケラン
19	須恵器	甕	—	(13.2)	<5.7>	—	ヘラナデ	底部・肩縁ヘラケズリ、甲目	回転美調	カケラン
20	石器	砥石	<7.2>	<3.9>	<3.0>	<142.6>	下部欠損、砥面数4、正面に糸痕		完全美調	W・E
21	石器	台石	<20.0>	<16.7>	<6.8>	<3360.0>	右側→下部欠損、使用面1		完全美調	W・E
22	石製品	白(土白)	<13.0>	<8.5>	<10.5>	<1180.0>	φ 26.0、約 1/8 残存		完全美調	H13を切るカケラン
23	石製品	黒白	<16.8>	<13.7>	<12.3>	<1760.0>	右側欠損		完全美調	H13を切るカケラン

H 14 舟住原址出土遺物観察表

No.	器種	器形	口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内面	外面	備考	出土部位
1	土師器	環	—	6.0	<2.4>	—	ロクロナデ→黒色処理	ロクロナデ→黒色処理、右回転糸切	完全美調	甕土
2	土師器	椀	(16.8)	—	<4.8>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ、高台欠損	回転美調	甕土
3	土師器	皿	(16.8)	—	<2.9>	—	ロクロナデ	ロクロナデ、高台欠損	回転美調	ホリ
4	須恵器	環	(13.0)	(7.2)	3.7	—	ロクロナデ、火押痕	ロクロナデ、火押痕、回転糸切	完全美調	ケ
5	須恵器	環	(13.4)	5.5	3.7	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全美調	ケ
6	須恵器	環	(14.2)	—	<3.6>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転美調	甕土
7	須恵器	環	—	5.9	<3.1>	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全美調	ホリ
8	灰陶器	甕	(14.4)	—	6.5	<2.1>	ロクロナデ→落輪	ロクロナデ→落輪	完全美調	甕土
9	土師器	甕	(14.4)	—	<7.0>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	完全美調	甕土
10	土師器	甕	(20.6)	—	<15.9>	—	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転美調	甕土
11	須恵器	壺	(8.0)	—	<6.0>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転美調	甕土
12	武器	刀子	<13.6>	1.6	1.0	<31.0>	基部欠損、磨削で本体サイズ不明		完全美調	No2

H 15 居住原址出土遺物総覧表

No	器種	器形	口径(長)	口径(短)	底径(短)	底径(長)	高さ(厚)	重量等	内面	外面	成形・調整	備考	出土層位
1	須恵器	環	—	—	—	—	<2.0>	—	ロクロナデ	—	ロクロナデ	破片・支脚・拓本	N区
2	須恵器	蓋	—	—	—	—	—	—	当耳痕	—	平行切目	破片・支脚・拓本	S区

H 16 居住原址出土遺物総覧表

No	器種	器形	口径(長)	口径(短)	底径(短)	底径(長)	高さ(厚)	重量等	内面	外面	成形・調整	備考	出土層位
1	須恵器	環	(14.0)	—	—	(7.6)	4.2	—	ロクロナデ	—	ヘラ切り	回転・支脚	覆土
2	土師器	ロクロ皿	—	—	—	—	<21.3>	—	ヘラナデ→ヘラミガキ	—	ヘラケズリ	回転・支脚	覆土・覆土ホリ

H 17 居住原址出土遺物総覧表

No	器種	器形	口径(長)	口径(短)	底径(短)	底径(長)	高さ(厚)	重量等	内面	外面	成形・調整	備考	出土層位
1	土師器	椀	(14.2)	—	—	—	<4.6>	—	ヘラミガキ→黒色処理	—	高台火摺	回転・支脚	I区

整穴建物址出土遺物総覧表

No	器種	器形	口径(長)	口径(短)	底径(短)	底径(長)	高さ(厚)	重量等	内面	外面	成形・調整	備考	出土層位
1	土師器	環	(13.2)	—	—	—	<2.9>	—	ヘラミガキ→黒色処理	—	ロクロナデ	回転・支脚	Ta1 覆土
2	土師器	北式盛形杯	(14.6)	—	(15.2)	—	<5.1>	—	ナデ	—	ヘラケズリ	回転・支脚	Ta1 覆土
3	石製品	白玉	<1.0>	<1.10>	<0.25>	<0.36>	—	—	孔径 0.25、約 1/3 火摺	—	—	—	Ta1 覆土
1	土師器	北式盛形杯	(15.0)	—	(15.4)	—	<4.8>	—	ナデ	—	ヘラケズリ	回転・支脚	Ta2 覆土
2	土師器	台付盤	—	—	—	<1.7>	—	—	刻離	—	付高台	回転・支脚	Ta2 覆土
1	土師器	環	—	—	(7.0)	—	<1.6>	—	ヘラミガキ→黒色処理	—	回転・糸切	回転・支脚	Ta3W 区
2	須恵器	環	—	—	(8.8)	—	<1.2>	—	ロクロナデ	—	回転・ヘラ切り	回転・支脚	Ta3 ケン
3	土師器	蓋	(9.2)	—	—	<4.5>	—	—	ナデ→黒書?	—	ヘラケズリ	回転・支脚	Ta3 ケン
4	石部	打裂石斧	<7.2>	<4.0>	—	—	<0.9>	<34.7>	基部火摺	—	—	完全・支脚	Ta3 ケン

ビット出土遺物総覧表

No	器種	器形	口径(長)	口径(短)	底径(短)	底径(長)	高さ(厚)	重量等	内面	外面	成形・調整	備考	出土層位
1	須恵器	環	(12.0)	—	—	—	<3.0>	—	ロクロナデ	—	ロクロナデ	回転・支脚	P1
2	土師器	武蔵鏡	(20.4)	—	—	—	<3.3>	—	ナデ	—	ヘラケズリ	回転・支脚	P1
3	土師器	武蔵鏡	—	—	(3.2)	—	<2.2>	—	ナデ	—	ヘラケズリ	回転・支脚	P1
1	土師器	環	—	—	—	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	—	ロクロナデ、高台火摺	破片・支脚	P10
1	土師器	武蔵鏡	(23.6)	—	—	—	<3.0>	—	ナデ	—	ナデ	回転・支脚	P13

土坑出土遺物種別表

No	器種	器形	口径(長)	法	直径(短)	器高(厚)	重量等	内容	内面	成形・調整	備考	出土層位
1	土師器	杯	—	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ	破片・表割	D1E区
2	土師器	輪	16.0	7.2	5.1	—	—	—	—	ロクロナデ	完全表割	D1覆土
3	土師器	輪	—	7.0	<2.7>	—	—	—	—	ロクロナデ→黒漆、回転糸切→付高台	完全表割	D1覆土
4	土師器	輪	—	7.6	<2.7>	—	—	—	—	回転糸切→付高台	完全表割	D1E区
5	須恵器	環	(17.0)	—	—	—	—	—	—	ロクロナデ	破片・表割	D3覆土
2	須恵器	杯	(14.8)	—	<4.0>	—	—	—	—	黒色処理	回転表割	D3W区
3	須恵器	杯	—	4.8	<1.1>	—	—	—	—	ロクロナデ	完全表割	D3W区
4	土師器	口クロ裏	(16.6)	—	<5.3>	—	—	—	—	左?回転糸切	完全表割	D3W区
5	土師器	磨石	11.5	7.0	2.9	254.0	—	—	—	ロクロナデ	完全表割	D3W区
1	土師器	輪	12.3	5.7	3.6	—	—	—	—	回転糸切	完全表割	D5E・W区
2	灰陶器	杯	—	—	(7.6)	—	—	—	—	回転糸切→付高台	完全表割	D5E区
3	土師器	環	—	—	<1.4>	—	—	—	—	ロクロナデ	破片・表割・拍本	D5覆土
4	土師器	環	—	—	—	—	—	—	—	ロクロナデ→削骨	破片・表割・拍本	D5覆土
1	土師器	輪	—	—	<3.8>	—	—	—	—	ロクロナデ→削骨	回転表割	D6N区
2	須恵器	杯	(13.2)	(5.6)	<1.6>	—	—	—	—	右回転糸切	回転表割	D6N区
3	須恵器	杯	(13.6)	—	<1.6>	—	—	—	—	ロクロナデ	回転表割	D6N区
1	土師器	武蔵鏡	—	—	<9.4>	—	—	—	—	ヘラケズリ	回転表割	D9覆土・M2
1	土師器	杯	—	—	<2.1>	—	—	—	—	右回転糸切	回転表割	D10覆土
1	土師器	杯	(13.6)	—	<3.7>	—	—	—	—	ロクロナデ	回転表割	D12覆土
1	土師器	輪	—	—	<2.9>	—	—	—	—	ロクロナデ、高台欠損	回転表割	D13覆土

溝址出土遺物種別表

No	器種	器形	口径(長)	法	直径(短)	器高(厚)	重量等	内容	内面	成形・調整	備考	出土層位
1	土師器	杯	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	破片・表割	M1W区
2	土師器	輪	—	6.5	<2.0>	—	—	—	—	ロクロナデ→黒漆	完全表割	M1W区・D1
3	土師器	輪	—	(7.2)	<2.0>	—	—	—	—	回転糸切→付高台	完全表割	M1E区
4	土師器	輪	—	(7.6)	<2.0>	—	—	—	—	回転糸切→付高台	回転表割	M1W区
5	土師器	武蔵鏡	(19.8)	—	<5.0>	—	—	—	—	ヘラケズリ	回転表割	M1E区
6	土師器	口クロ裏	(22.0)	—	<5.3>	—	—	—	—	ロクロナデ	完全表割	M1覆土
7	石製品	磨石製品	10.0	7.2	2.9	121.5	—	—	—	全体に磨り	完全表割	M1E区
1	赤土器	環	18.8	—	<19.4>	—	—	—	—	壺底破状文、壺指脈状文、ヘラミガキ	完全表割	M2覆土
2	赤土器	環	—	—	<12.5>	—	—	—	—	壺底破状文、壺指脈状文	完全表割	M2覆土
3	赤土器	環	—	6.0	<7.0>	—	—	—	—	ヘラミガキ	完全表割	M2覆土
4	赤土器	壺	(22.4)	—	<5.6>	—	—	—	—	壺底破状文、ヘラミガキ→赤彩	回転表割	M2覆土
5	赤土器	壺	(34.0)	—	<9.6>	—	—	—	—	ハケ目→ヘラミガキ	回転表割	M2覆土
6	赤土器	壺	—	—	<14.6>	—	—	—	—	壺底破状文、ヘラミガキ→赤彩	破片・表割・拍本	M2覆土
7	赤土器	壺	—	—	<14.6>	—	—	—	—	ハケ目→ヘラミガキ	回転表割	M2覆土
8	赤土器	手捏土器	6.0	4.0	4.6	—	—	—	—	ナデ、壺込赤彩?	完全表割	M2覆土
9	石器	凹石	15.1	12.1	8.0	420.0	—	—	—	凹径7.5×6.8、凹深2.5	完全表割	M2覆土
10	石器	磨石	>9.7>	<6.1>	<2.5>	<218.0>	—	—	—	裏面欠損、全面磨り	完全表割	M2覆土

遺構外出土遺物観察表

No	遺物種	形	法		重量等	成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)		内面	外面		
1	土師器	杯	—	(7.6)	<4.9>	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→付高台		P6カクラン
2	須臾器	環	—	(5.6)	<2.4>	ロクロナ子	回転糸切		P6カクラン
3	埴輪器	罎	(13.0)	—	<2.1>	ロクロナ子→飾輪	ロクロナ子→飾輪		P6カクラン
4	土師器	ロクロナ子	(14.2)	—	<8.0>	ロクロナ子	ロクロナ子		覆土
5	土師器	ロクロナ子	—	(8.6)	<2.8>	ロクロナ子	回転糸切→底部・四縁ヘラケズリ		覆土
6	石器	砥石	<5.0>	<2.6>	<1.8>	下部欠損、砥面数4	完全未測		P6の風
7	石器	砥石	<5.2>	<2.7>	<63.2>	上部欠損、砥面数2、正面に茶痕	完全未測		覆土

施す1と櫛描斜走文を施す2が存在する。壺は赤彩を施すものと、施さないものが認められる。頸部文様帯が残存する6は、多段の櫛描簾状文が施されている。手捏は輪積痕を残す鉢状の形態である。このような手捏土器は佐久市の弥生時代後期の遺跡から少なからず出土しており、例外的な存在ではない。輪積痕を残す行為は「人形土器」の内面にも共通するものであり、注意が必要であろう。

以上の出土遺物と、遺構の形態から本址は弥生時代後期箱清水期の環濠と考えられる。

第5節 ピット(第40・41図)

17基検出された。調査区全体に展開している。詳細は計測表を参照されたい。

第6節 遺構外出土遺物(第42図)

本来は遺構に伴うものであるが、重機による表土除去作業などにより遺構から切り離されてしまった遺物群である。当然のことながら、その内容は遺構出土土器の特徴を反映している。詳細は出土遺物観察表を参考されたい。

第III章 まとめ

根々井居屋敷遺跡はその名が示すとおり、根々井氏の館跡の存在を示唆する場所である。現在館跡は、今回の調査地点の西南に位置する正法寺とその周辺が長野県史跡に指定されているが、発掘調査によりこの指定地が館跡であることを証明できる成果は今のところない。今回の調査でも根々井氏の館跡に関連するような成果はなかった。

今回の調査では、弥生時代後期の環濠が発見された。湯川沿いには多くの大規模な弥生集落が中期後半以降展開しているが、現根々井集落の地下にもそのような集落が存在することが明らかとなった。根々井大塚古墳が近くに存在するが、古墳時代前・中期の遺構は存在しなかった。後期になると遺構が散見され、根々井氏の趨勢に関連するのだろうか？奈良時代から平安時代9世紀にかけて隆盛する。

出土遺物の面からも今回の調査地点が、古代の一般集落とは異なるものであることをH9号住居址から出土した「和同開珎」の存在が示している。佐久市内では本例も含め7枚出土しているが、県内全体でも29枚の出土例しかない希少遺物である。



H1 号住居址



H1 号住居址カマド



H2 号住居址



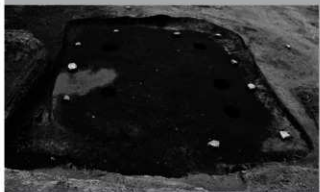
H3 号住居址→



H4 号住居址



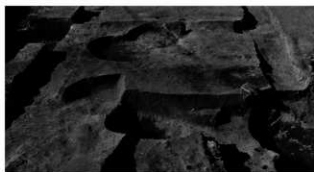
H5 号住居址



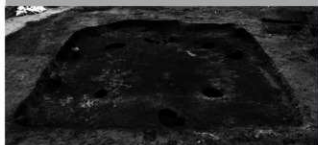
H6 号住居址



H7 号住居址



H8号住居址



H10号住居址



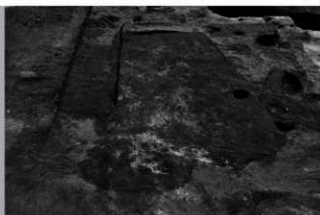
H12号住居址



H13号住居址カマド



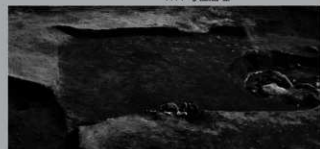
H15号住居址



H9号住居址



H11号住居址



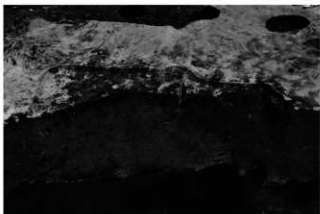
H13号住居址



H14号住居址



H16号住居址



H17号住居址



Ta1号竪穴建物址



Ta2号竪穴建物址



Ta3号竪穴建物址



F2号掘立柱建物址



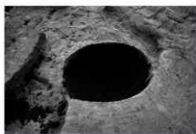
F1号掘立柱建物址



M1号溝址



M2号溝址



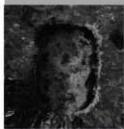
D1号土坑



D2号土坑



D3号土坑



D4号土坑



D10号土坑



D5号土坑



D6号土坑



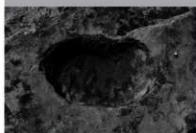
D7号土坑



D8号土坑



D9号土坑



D11号土坑



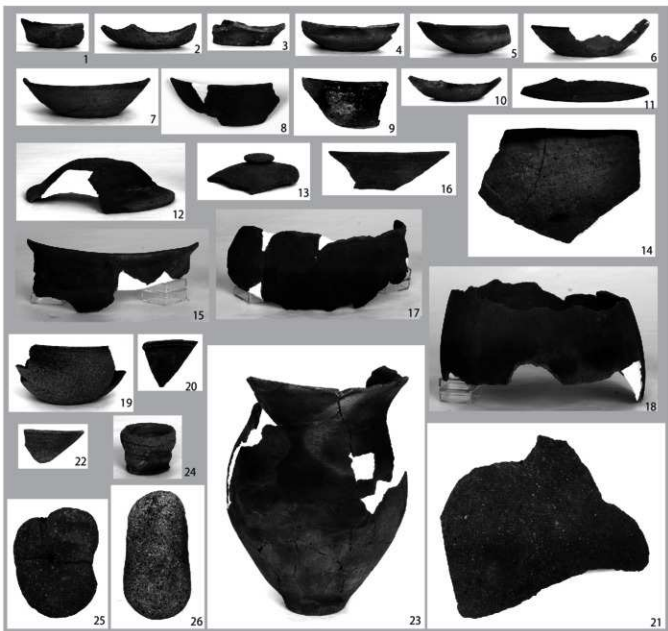
D12号土坑



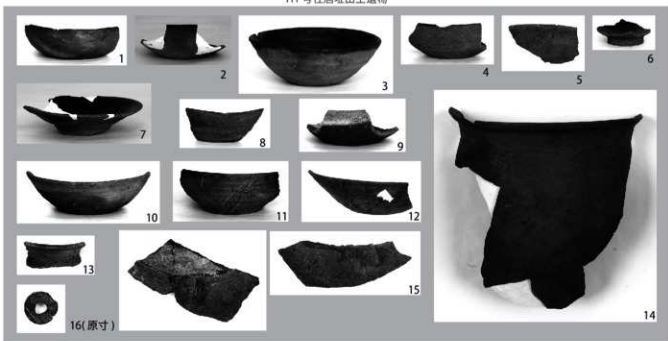
D13号土坑



全景（北から）



H1号住居址出土遺物



H2号住居址出土遺物



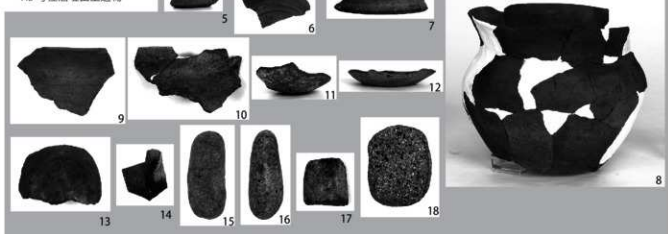
H3号住居址出土遺物



H4号住居址出土遺物



H5号住居址出土遺物



H6号住居址出土遺物



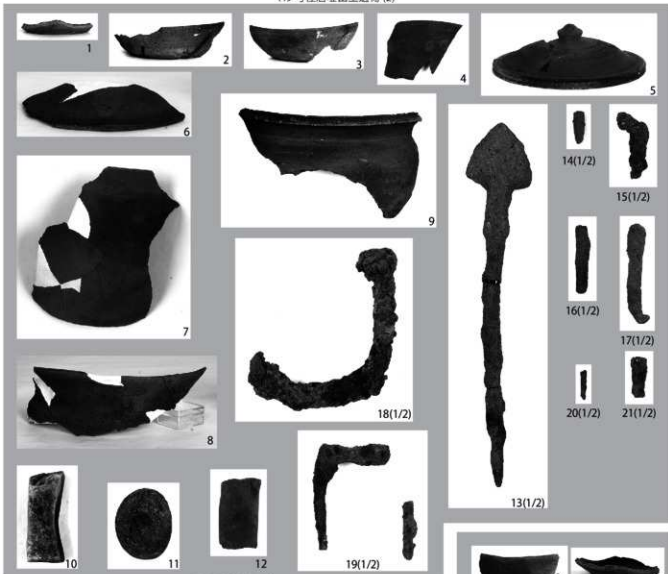
H8号住居址出土遺物



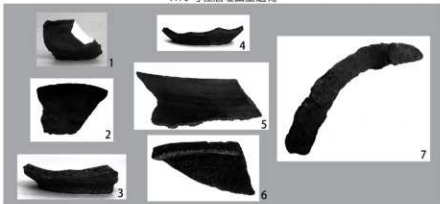
H9号住居址出土遺物(1)



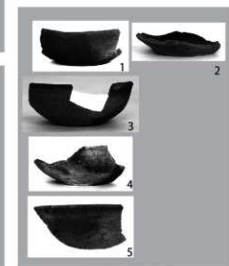
H9 号住居址出土遺物 (2)



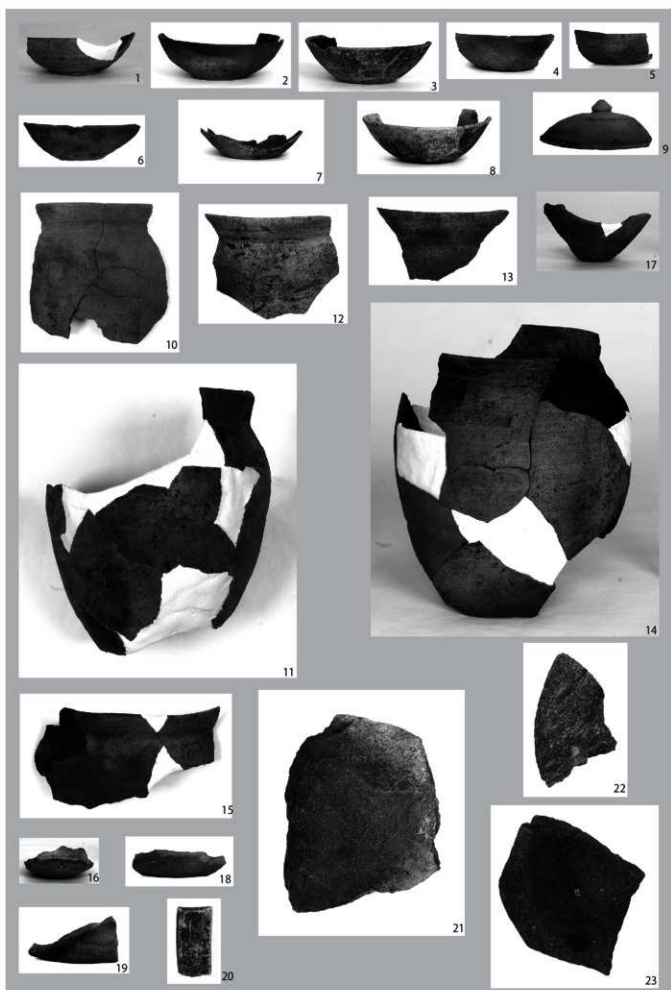
H10 号住居址出土遺物

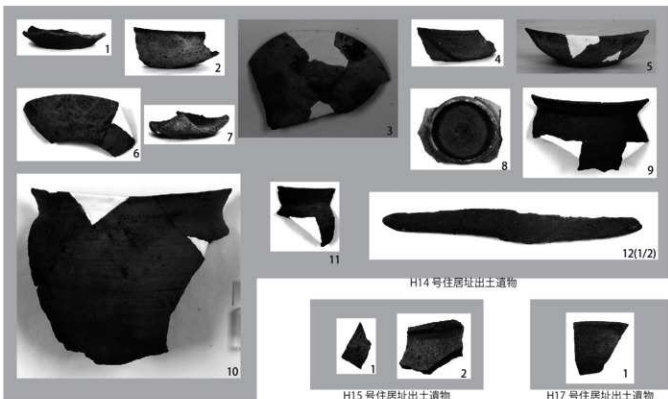


H11 号住居址出土遺物



H12 号住居址出土遺物





H14号住居址出土遺物



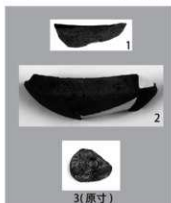
H15号住居址出土遺物



H17号住居址出土遺物



H16号住居址出土遺物



Ta1号竪穴建物址出土遺物



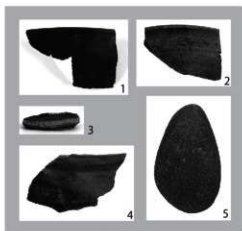
Ta2号竪穴建物址出土遺物



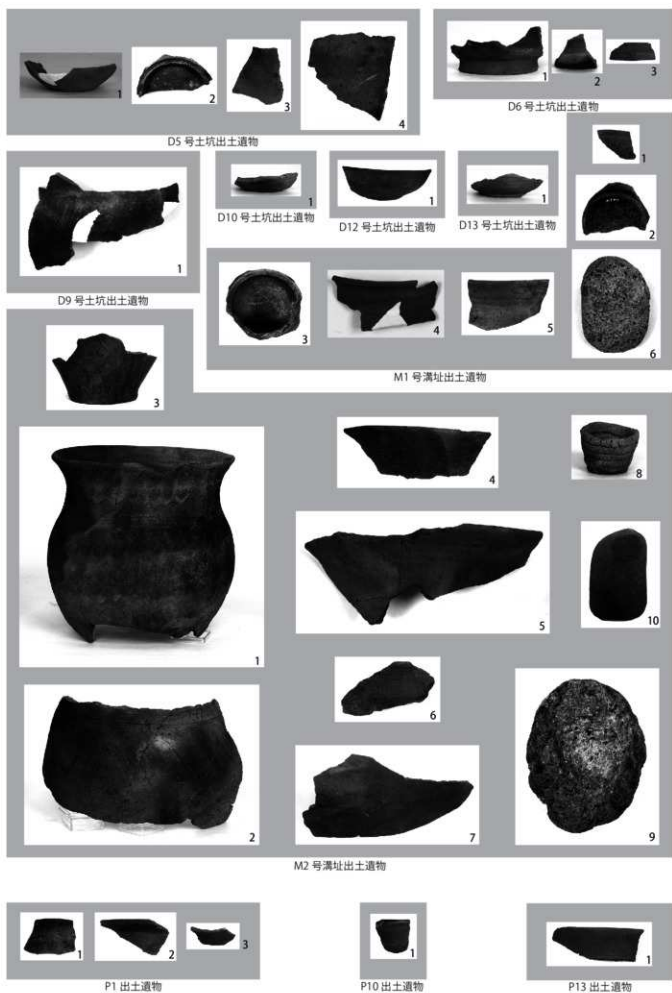
Ta3号竪穴建物址出土遺物



D1号土坑出土遺物



D3号土坑出土遺物





遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ねねいやしきいせき 1							
書名	根々井居屋敷遺跡 I							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 267 集							
編著者名	小林眞寿							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込 2913 ℡ 0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	令和 3 年 (2021) 3 月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	36° 15'42"	138° 27'27"	平成 31 年 4 月 1 日～ 令和 3 年 3 月 19 日	690㎡	福祉施設 建設
ねねいやしきいせき 1	さくしねいあざいせき	20217	94					
根々井居屋敷遺跡 I	佐久市根々井字伊勢田 816 外							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
根々井居屋敷遺跡 I	集落址	弥生 古墳 奈良・平安 中世	竪穴住居址・17 軒 掘立柱建物址・2 棟 竪穴建物址・3 土坑・16 基 溝址・2 条 ピット・15 基	弥生土器 土師器 須恵器 灰軸陶器 石器・石製品 鉄器・銅器		和同間跡の出土		
要約	弥生時代後期の環濠、奈良・平安時代集落址及び中世遺構の調査。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 267 集

根々井居屋敷遺跡 I

令和 3 年 3 月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒 385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒 385-0051 長野県佐久市中込 2913

℡ 0267-63-5321

印刷所 双葉印刷